

# 古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (11) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

## A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (11): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

### I. 本研究の課題と構成について

#### 1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886～1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (9) (都留文科大学大研究紀要第87集、2018年3月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』第Ⅲ巻 (第4編) の「1 Greek Medicine as Paideia パイデア—としてのギリシアの医術」(3p～45p) を対象とした本継続研究 (5) (6) (8) (9)、を受けての〈全体の考察〉から始める。続いて、2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」(その1) の訳出と検討に入る。

#### 2. 小論の構成について

小論Ⅱ. は、『パイデア』第Ⅲ巻 (第4編) の「1 Greek Medicine as Paideia パイデア—としてのギリシアの医術」(3p～45p) の〈全体の考察〉とする。小論Ⅲ. は、「2 The Rhetoric of Isocrates and Its Cultural Ideal イソクラテースの弁論術とその教養理念」(46p～70p) の前半部の訳出と〈注記と考察〉で構成する。なお訳文の項の区切りは、ドイツ語版にはない、英訳版で設定された1行空けの区切りを使っている。その項の見出しは私が便宜的に付したものである。またその末尾に「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) を〈原文注記〉として配し、続いてそれに対する〈注記と考察〉を記す。

なお小論の末尾に、IV. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑤～継続研究 (11) における～」を置く。

#### 3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第Ⅲ巻 (1944年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に

際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版(1989年、初版は1973年)を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し(格変化などは、構文の類推可能性のことを考え、原文中のまま扱っている)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。イエーガーが指示する参照文献等の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

なお、〈注記と考察〉などでギリシア古典の訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは、とくに注記しない場合は、すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ) 訳文中のitなどの指示語についてはその内容を補足説明する場合がある。その場合は、これまでは(=補足説明)という表記をしていたが、この継続研究(11)より、[補足説明]という表記で統一する。その他のカッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) 〈注記と考察〉における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究(5)と同様である。

#### 4. 本継続研究における訂正と補筆

##### [訂正について] (その2)

\* [訂正について] は本継続研究(5)に記載したものを(その1)とする。

イ) 本継続研究(6)のⅡ. 10(4)の〈訳文〉(論文ページ272の上から21行目)に誤記がある。

(誤) 「αἰσθησις」 → (正) 「αἴσθησις」

ロ) 本継続研究(9)のⅡ. 15. の〈注記と考察〉(1)の伊藤著『古典期のポリス社会』からの引用文に誤記があるとの指摘を受けた。感謝し、次のように訂正する(論文ページ337の下から11行目)。

(誤) 「在留邦人 metoikoi」 → (正) 「在留外人 metoikoi」

ハ) 拙論「想起に関する研究—社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて—」(都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月25日)における誤記を、「訂正について」(その1)に加えて、下記のとおり訂正する。

(論文ページ100のヴァイツゼッカー大統領演説からの引用文)

(誤) 「Geshichte」 → (正) 「Geschichte」

(誤) 「Menshen」 → (正) 「Menschen」

(論文ページ102のトゥーキュディデース『戦史』からの引用文)。

(誤) 「今や法 (νομος, the laws)」 → (正) 「今や法 (νόμος, the laws)」

##### [補筆について] (その1)

イ) 本継続研究(3)の「Ⅲ. 全体の考察の1. 出版経緯と反響について」のニ)の項のあとに、次の項を補筆として挿入することとする。

ホ) 英訳版におけるインデックス

ドイツ語版にはインデックスは付されていないが、英訳版には全巻末にインデックス (INDEX) が付されている。このことも英訳版の充実を示しており、上記した経緯や英訳版における加筆などのことと合わせ、英訳版はドイツ語版の翻訳でありながら、イエーガー著『パイディア』の‘決定版’というべき性格をもっている。

ロ) 本継続研究 (10) II. 7. の〈注記と考察〉 (5) の末尾に、改行して次の文章を補筆として挿入することとする。

イエーガーが「麗しい古い酒宴の歌」として引いているものは、プラトーン『ゴルギアース』の、ソクラテースの発言のなかで引かれている (451e)。岩波文庫『ゴルギアース』(1967年)では、訳者の加来彰俊は注記において、歌の様式を詳しく説明し、「…なお、人間にとっての善をこの順に数えることは、『メノン』(87e)、『エウテュデモス』(279a)、『ピレボス』(48d)、『法律』(631c,638a) などにもみられる。」と指摘している。なお、小論で「二番目のものは容姿が美しいこと (being fair to see, schön an Wuchs zu sein)」と訳した箇所は、加来は「次に善いのは器量のよいこと (καλόν, beauty)」と訳している。しかし『ゴルギアース』では、その歌に対応するように「医者」の役割、「体育教師」の役割、「実業家」の役割が述べられていく。これはイエーガーが古代ギリシア思想として注目している関係でもある。原文の καλός には多くの意味合いがあるが、第一には「(容姿・外見・形・造り、等の) 美しい、見事な、立派な; (道徳的・精神的な意味で) 美しい、善い、尊敬すべき、品位のある、正しい、神意・人倫に適った」という意味をもっており (古川編著『ギリシャ語辞典』1989年)、したがって「器量のよいこと」ではなく「容姿が美しいこと」と意識して訳されるべきだろう (古代ギリシアにおけるこうした叙述は、具体的には身体を露にするギリシア人の青壮年男子がイメージされていると考えられる)。なお此処の歌のドイツ語版での Wuchs には「体格、容姿」などの意味がある。

ハ) 本継続研究 (10) III. 考察ノート④の2頁目 (37p) の下から12行目の「…。なおイエーガーは、」と「『初期キリスト教とパイディア』の趣旨を、…」との間に、下記の文章を補筆として挿入することとする。

すでに、ドイツ語版第I巻初版の「序文」(1933年10月)で、第I巻と第II巻の趣旨を説明したあとに、「私は追って、ローマと初期キリスト教が、ギリシアに始まる教養過程にどのように引き込まれていったのかを示そうと思う。」と述べ、さらに英訳版第II巻の「序文」(1943年7月)で「これらの二つの巻で叙述された四世紀の教養論争と、人を高尚にする洗練された教養のローマへの影響とに加えて、ヘレニスティックなギリシア的パイディアのキリスト教のパイディアへの変容は、この研究の最大の歴史的テーマである。」と自らの研究構想を説明している (本継続研究 (3) の〈訳文①〉〈訳文④〉)。そのようにイエーガーは、

## II. 「パイデイヤーとしてのギリシアの医術」(英訳版第Ⅲ巻第4編の1 Greek Medicine as Paideia : 3 p~45p) の〈全体の考察〉

イエーガーの「パイデイヤーとしてのギリシアの医術」の章は、本継続研究の(5)(6)(8)(9)において対象としてきた。その該当箇所の記事と検討が終わったので、ここで改めて全体的な考察を行なっておく。

### イ) 「パイデイヤーとしてのギリシアの医術」の叙述内容について

イエーガーの論述の各項には、そのパートの論旨を表現するよう、便宜的にタイトルを付してきている。したがってここでは、イエーガーの論述の輪郭についてはそのタイトル名で確認することとし、各項の叙述内容は、要約という形をとらず、とくに注目しておきたい箇所を抜粋して引くという方法をとる(不連続性を残したまま「」でつなぐ)。

#### 1. ギリシアの医術とパイデイヤー

「プラトーンは、医者のことを、知の高度に専門化され洗練された分野の代表者と考えており、…専門職の掟(職業倫理)を、…実践行為における知と目的との間の適切な関係の完全なモデルとして十分に厳格なものであり、また彼はそれを、理論的な知が如何に人間生活の構造を変容させるのを助けるかを自分の読者に理解させるためにしばしば引いているのだが、その具体化とも考えている。」「当時存在していた人間の知のあらゆる分野(数学や自然科学を含む)のうちで、医術はもっとも密接にソクラテースの倫理的な科学に近親性がある。」「あの時代より、…医術はますます一般教養の構成要素となっていった。」「ギリシア的教養はいつも、精神(the soul)ばかりではなく身体(the body)の教養でもあり続けていた…。その実態は、早期のギリシア人の教育を作っている二元的な制度に体现されていたつまり体育(gymnastics)と‘music’である。」

#### 2. イオーニアー地方の自然哲学と医術——「自然」理解の展開

「…そのようなごく初期のイオーニアー地方の自然哲学者たちがもしいなかったら、医術は決して科学にはならなかったであろう。」「エジプト人は、イオーニアー人たちができてそうしたようには、自然(nature)を宇宙の全体(a universal whole)だと考えることができなかつたのである。」「…自然(Nature)(φύσις)という支配的な概念の起源についてはまったく疑いがない。ソフィストたちや彼らの教育理論を論じるとき、われわれは、人間の(human) *physis* が教育過程全体の基礎なのだという考えの画期的な重要性のことに言及してきた。」「自然(physis)の概念は、前ソクラテース的哲学の非常に多くがそれに基づいてきていたのであるが、人間の身体的自然という医術理論にもっともうまく応用され、拡張されたのであり—その理論が、その後の、その概念の人間の精神的な自然(man's spiritual nature)へのすべての応用にとっての原型となっていったのである。」「…このように、二つの非常に異なる種類の思想の間の、最初の実り多い接触のあと、それらが相互の領域に浸透する不安定な時代が続き、したがって医術と哲学との間のすべての境界線が溶解する恐れがあった。」

#### 3. 「ヒッポクラテースの'全集」とされるものについて

「…ヒッポクラテースは、アリストテレスと同様に、ヘレニスティックな時代に精神的な復興をし、その時代にヒッポクラテースとアリストテレスの研究の諸学派が目覚め

たのであって、それらは、ギリシア文化が—それとともに医学が—生き続ける限り存続した。」「他方、非常に多くのこれらの‘ヒポクラテース風の’論文があり、その結果、真のヒポクラテース探しの間に、学者たちは思わず知らず、ギリシア精神の古典時代における医学のより詳細な像を作り出していたのである。今までのところ、その輪郭だけが明らかなのだけれども、それは驚くほど興味深い光景である。それは、単純に一つの学説体系を示すだけでなく、われわれに科学の正に生命を、そのあらゆる分枝や矛盾とともに、見せる。」

#### 4. ‘素人 (layman, Laien)’ と ‘専門家たち (professionals, Fachleute)’ の区別の現れ

「医術に関する文献は、この理由で、ギリシア精神史におけるまったく新しい経験であり、それは教えること、しかも直接に教えることが意図されていたのではあるが、それが普通の人に話しかけられることは、それがあったにしても、哲学や詩とちがって、ごくわずかなことだったのである。その出現 (= 文書による医学の出現) は、今やわれわれがますます注意を払うことになる、歴史的な傾向の主要な例であり一つまり、生活がいよいよ専門化する傾向、あるいは知識が、高い知的、倫理的資質をもつごく少数の専門的に訓練された人間にしか就き得そうにない特定分野の専門性へと分割される傾向のことである。医術の著者たちがしばしば‘素人 (layman)’ と ‘専門家たち (professionals)’ のことを話しているということは意義深いのであって—長い、重要な歴史をもつことになった区別であるが、しかしそれは、ここで初めてわれわれに出会う。」

#### 5. 医学者が医術を素人大衆に語る——医術の教養をもつ公衆の誕生

「しかし実際には、新しい医学は、ギリシアの一般的な精神的な生活とそれほど鋭く一線を画していたわけではなかった。それは、そこに自分自身の場所を確立しようと努めた。それは公衆から離れたところに自らを置く学問の特別な一分野を基礎としていたのであるが、それは慎重に、あの知識を彼らに伝えようとし、また彼らにそれを理解させる方法と手段を見いだそうとした。それは、医療従事者ではない読者に語られる、特別な種類の医学文献というものを生み出した。幸運にも、われわれはまだ次の双方の種類のいくつかをもっているものであり一つまり、専門家に向けて書かれた論文と、そしてもう一つは一般公衆に述べられたものである。われわれが持っている著作の大部分は最初の部類に属しており、ここではそれらにふさわしく十分に扱うことはできない。われわれの関心は当然にも第二の種類に集中するのであり、それは、その著作の質が非常に高いからだけでなく、それが実に、ギリシア人がパイデアーと呼んだもの的一部分だからである。」

#### 6. 専門領域と‘教養のある人間’——「パイデアー」が「一般教養」の意味をもち始める

「…しかし教養ある人間は判断する能力をもっており、彼の鋭い眼識は、しばしば創造的な学者の自らの分野のそれよりもいっそう信頼できる。純粋な専門家と純粋な素人の出現は、ソフィストたちの時代以降のギリシア教養史における特徴的な現象である。アリストテレスは単にそれを当然なことと考えている。われわれはそれを実に明瞭に、初期の医術文献のなかに見ることができるが、それは大いに改宗者を作りたがっている。専門科学が一般教養の領域に入る許可は、いつも固い社会的水準によって制限されており、せいぜい紳士が知るのにふさわしいものしか許されていない。アリストテレスにおいても、われわれは倫理的な格率に出会うのであり、そこから彼は、教養の発育にとってきわめて

重大な結論を引き出したのだが、それは、過度な専門化は自由な教養及び真の紳士らしさとは調和し得ない、というものであった。見よ、科学が勝利した時代においてさえ、いかに古い貴族的な教養がまだその誇り高い頭をまっすぐ立てていたかを！」

### 7. 古代ギリシア医術における自然哲学の影響と医術としての自立への格闘

「ギリシア医術の歴史は、その文献によってわれわれに知られているように、自然哲学理論の支配に対するその格闘…から始まる。」「今や、その注意深い経験的方法と個別的事例の要件の詳細な観察への回帰によって、医術は、あらゆる自然哲学（その助けによってそれは科学へと高まったのであるが）からは独立した一つの技術として決定的に区別され、そしてついに真のそれ自身になったのである。論文 *On ancient medicine*（「古来の医術について」）の無名の著者は、最大の自信をもってこの主張をしている。」「彼は、彼の敵対者が医術を自然哲学のより高度だと一応は思われている水準に高める努力を、誇り高い見解で対抗する。‘私は、自然の正確な知識を得るには医術によるしかないと思っています。’と。このことばはわれわれの耳には奇妙に聞こえとしても、それは彼の時代においてはまさにふさわしい。自然研究はまだ正確さという本分を学んでいなかった。そのことを他のあらゆる科学に先駆けて学んだ唯一の自然についての科学が、医術だったのであり、なぜなら医術においては、成功は細かな事実の正確な観察にまったく依拠しており、人間の生命がかかっているのである。そもそも人間とは何か、ではなく、‘人間は、その人の食べ物、飲み物、その人の暮らし方、そしてそれらすべてのその人への影響の仕方、との関係で、どういう存在であるのか’—*that*（そのこと）が、われわれの著者が中心的な問題だと考えていることである。」「…医術において ‘human nature’ を一般的に語るのは愚かなことである。」

### 8. 広く症例を吟味し、一般化の方法を洞察していく

「*Epidemiai*（「流行病」）、*Visits*（「異国の諸都市への訪問」）と称される7冊の本は、医術における新しい傾向の典型である、この意識的に差し控えられた経験主義的態度に対し、適切な背景を示す。」「…真の学者は決して個々の部分…でとどまりはしない。真理は、個別的事例の無限の多様性に分解されることは決してない、あるいは、もし真理がそんなことであれば、それはわれわれにとって何の実際的意味をもたないということになる。そうやって、あの時代の医学思想家たちは、人間本姓（human nature）の、体格、気質、病気、その他の、類型（types）（*είδη*）という概念に到達したのである。*Eidos* は、先ず第一に、‘form’（形、外形）を意味し、それから、諸個人から成るある群の形（the form）を他の群のものから区別する、目に見える‘signs（兆候）’を意味するのであるが、しかし、それはただちに、いろいろな関連する現象に共通する、識別可能などのような特徴（features）にも拡張され、そのようにして（とくに複数形では‘type’（類型）あるいは‘kind’（種類）という意味をもつようになる。その種の一般化は、「古来の医術について」の著者にさえも受け入れられている。」「古来の医術について」の著者は、*as it was then conceived*（当時思われていたような）哲学に激しく反対しているのであるが、また彼は時には経験主義者にも鋭い打撃を与えもし、故意に怒らせようとしているように見えるのであるが、それでも彼が開拓している哲学的探究のたくさんの新しい道には驚嘆しないわけにはいかない。彼がそのことを自覚しているという印象を、彼は‘sophist’と呼ばれたいとまったく思っていないのであるが、禁じ得ない。」「…医術が哲学思想の新しい分野

を開いたのは、何人かの医者が出来合いの自然についての学説を見つけ取り入れたからではなく、そのなかのもっとも優れた才能をもつ学者たちが、真に独創的な、コロンブスのような野心的な企てに基づいて、‘nature’ とは何かを発見しようと試みたことによる—つまり全自然のなかの一分野から出発したのであり、その一分野は、彼らよりも前にはだれも、これほど心の底から、これほど共感をもって、あるいはその特有の法則に対するあれほどの深い理解をもって、探究した者はいなかったのである。]

### 9. 医術の経験主義的な潮流からプラトーンは自らの哲学探究の方法を洞察していく

「われわれはすでに、プラトーンが、その確かな洞察力をもって、そのまさに始まりから医術と親密な関係をもっていた、ということを示してきた。しかしわれわれはここで、もう少し詳しくその関係を説明してもよいのであり、というのは、医術の新しい方法と考え方の説明として、そのプラトーンとアリストテレスの哲学への影響ほどよいものはないからである。それをここで検討する他の格別の理由は、それが、真にパイデアーの中心的問題であるものを提出するということである。プラトーンが彼の倫理学や政治学を確立しているとき、彼はそれを、知の数学的範型 (type, Form) でも、思弁的な自然哲学でもなく、(彼が『ゴルギアース』やその他の著作で述べているように) 医学を手本にしたということは、偶然ではなかった。『ゴルギアース』で彼は、彼がテクネーの本質と考えるものを医術を示すことによって説明し、その主要な特徴をその例から導き出す。テクネーとは、人間に役立つことを目指す、それゆえそれが実行されるまでは知識としては不完全である、そのような、対象の本質 (the nature) のあの知識のことである。プラトーンによれば、医者は病気を正反対である健康の知識ゆえに認識する者であり、それゆえ、病気である者を正常な状態にもどす方策を見出すことができる者である。それが彼の、同じことを人間の魂とその健康のためにする、哲学者のひな型なのである。プラトーンの科学、つまり ‘healing of the soul (魂の療法)’ と、医者の科学とのこの比較は、それらが共通にもつ二つの特徴を説明し、生き生きとさせる。知の二種類は、それらの立論を自然そのものの客観的知識に基礎を置いている—つまり、医者は身体其自然 (nature) への洞察を基礎にして仕事をし、哲学者は精神の自然 (nature) の理解に基礎を置いて仕事をす。しかしそれぞれは、その自然の固有の分野を、単にそれを一連の諸事実として扱うことに拠ってではなく、身体、または精神 (魂) の自然構造の中に、哲学者にして教師である者と、医者との双方の行為を処方するあの指導原理を見出すことを予期することに拠って、探究する。健康、と医者は身体的存在の基準を呼ぶが、プラトーンの倫理的、政治的学説が人間の魂を洞察することになるのは、健康として、ということなのである。」[プラトーンがここで医術に固有なこととして叙述している方法は、実のところ彼自身が、とくに彼の後期の著作で、使っている方法であるということを確認するのに、彼の対話篇についての多くの知識を必要とはしない。医術の原本を読み、プラトーンによって叙述されている ‘ソクラテース’ の方法を、彼らがいかに多く前もって示しているかを発見するのは、ほんとうに驚くべきことである。われわれはすでに、どのように経験主義的な医者が、諸事実に強制され、彼らが長い研究によって定義してきた、同じ性質をもつ個々の事例を取り上げ、そして、types (Arten) あるいは forms (Formen) (εἶδη) (種類、類型) として ‘それらを一緒にして見る’ (プラトーンのことばを使えば) ことを始めたか、を見てきた。医術に関わる著者たちがこれらの多数の類型 (types) のことを話しているとき、彼

らはそれらを εἶδη と呼んだのであるが、しかし彼らのもっぱら複雑な現象の下に横たわる単一性 (the unity) を明らかにしたいときは、彼らは ‘one Idea’ あるいは ‘one Form’ という概念—つまり同一の様相あるいは外見 (μία ἰδέα) という概念を使っている。eidōs と idea の表現とプラトーンが使っている (医療文献とは関係なしの) それらの用法の研究は、同じ結論となった。これらの概念は、医者たちが身体とその機能を研究するとき初めて使われたのであるが、プラトーンによって彼が探究しつつあった特別な主題—倫理の分野—へと、そしてそこから彼の全存在論へと移された。彼以前には医学は、病気の種々の性質と相違 (πολυτροπία, πολυσχιδία) は重要な問題だと認めてきており、まさにそれぞれの病気の種類の正確な数を確定しようと努力してきていた—ちょうどプラトーンが自らの弁証法的な分析、それを彼はまた、一般的概念のそれぞれの類型 (types) への分割とか分解と呼ぶのであるが、でするように。]

### 10. ギリシア医学とプラトーン、アリストテレスの哲学思想

「医学を哲学と比較しているとき、プラトーンは主としてその規範的な性質のことを考えている。それゆえ彼は、同じ種類の知識の別の例として舵手のことに言及し、そしてアリストテレスはそうすることにおいて彼に倣う。しかし彼らは二人とも、医者と舵手の対照を評論「古来の医術について」から借用したのであり、そこでそれは、この関連において初めて使われたのである。しかしプラトーンが主として、舵手と医者は共に行為の規準を認識するようになるという事実に関心をもっているのに対し、アリストテレスはその示唆に富む比較を別の論点を証明するために使っている。彼の『倫理学』で論議されている中心的な問題の一つは、普遍的である規準というものを、個人の生活や、さしあたり一般的な規定で処理されることが不可能に見える個別事例にどのように適用するかである。この問いは教育の分野では決定的に重要である。そのことでアリストテレスは、個人の教育と共同社会の教育との間に根本的な区別を設け、それを医術の例によって支える。しかし彼はまた医術を、個人がいかにして自分自身の行為にとっての本物の規準を見出すことができるかを示すためにも使うのであって、というのは、医術は、適切な倫理的振る舞いが、健康な身体的食餌療法のように、過多と不足との間の中庸 (the mean) を保持することに存する、ということを示すのである。われわれはこの表現を、もしわれわれが、アリストテレスによれば倫理性はわれわれの欲望や嫌悪といった本能の調節に関係しているということを思い出すならば、一層理解できる。プラトーンは、彼よりも前に、満たすことと空にすることという医術概念を、欲望の理論を論じるのに使い、欲望とは、調節を必要とする ‘より多い、あるいは、より少ない’ ということが生じる分野の一つである、と結論を下していた。アリストテレスは、規準は中庸 (the mean) だという—しかしながら、両極端の間の厳密に固定された数学的な点ではなく、つまり計りの絶対的な中間ではなく、当の個人にとって適切な中間 (the right mean) のことである。このゆえに、倫理的行為は、過多と不足の間に、われわれにとって適切な中間を ‘めざす’ ことに存する。ついであるが、アリストテレスによって使われているすべてのことば—*excess* (過度), *deficiency* (不足), *the mean and the right proportion* (中間と適度), *aiming* (目指すこと), and *perception* (それに知覚) (αἴσθησις) —彼の絶対的な規則 (rule) が存在することの否定や、個人の本性にふさわしい規準 (a standard) が見いだされるべきであるという主張、はもちろん：こういうことすべてのが、直接的に医術から借りられており、



しかも彼のその論議はまさしく論文「古来の医術について」をもとにしている。」「プラトーンとアリストテレスは、自分たちの学説に対し、それが並行する思想分野で得られた結論に支えられることによって、いっそう高い権威を得る。ギリシア人の生活の組み立てにおいて、すべての部分はお互いに支え、また支えられており、石は石を支えている。ギリシア人の思想の発展におけるこの原理、それをわれわれはすでにその成長の早期のすべての段階の作品で見てきたのであるが、それが今や人間のアレテー (human arete) というプラトーンとアリストテレスの中心的な学説という決定的な論点で確認されるということを知覚することは重要である。そしてそれは、ひと目見て思われるような、単なる類似性の問題ではない。身体の適切な治療という医術学説は、言ってみれば、それが魂の適切な世話と治療というソクラテースの学説に取り入れられるとき、より高い力へと高められるのである。(というのは：denn) プラトーンとアリストテレスの、人間のアレタイ (the aretai) という概念は、精神のアレタイはもちろん、身体のアレタイも同様に含んでいるのである。このように、医術は完全にプラトーンの哲学的人間学、つまり彼の人間科学に同化される。この見地から、医術という専門の学問がどの程度までパイディアの歴史に属するののかという問いに、まったく新しい光が投げかけられる。医学は、理解力のある公衆に医術問題や医術思想をなにかがしかほのめかす以上のことをなす。その、人間生活の一領域、つまり身体の領域への集中をとおして、それは、哲学の、人間性 (人間本姓) の新しい像 (a new picture of human nature) を作り出すという仕事にとって決定的に重要となる発見をなし、そしてそれによって医学は、個人を人間性の理想によりびつたりと形成することに役立つのである。』

### 11. 健康維持 (= 身体の全体の「調和」) の学説とパイディアの思想——古代ギリシア 医術を特色づける「目的論」

「… (前) 5世紀、そして4世紀の医術によって、ギリシア人の典型的形成の偉大な精神過程になされた、もう一つの貢献があり—それは、近年になってはじめて現代医学によって重要だと認められるようになり、それにふさわしく発展させられてきた、ある真理である。それは健康維持の学説のことであり、それは、ヒポクラテースの医術によって教育科学に対してなされた、まさに創造的な貢献であった。われわれはそれを、あの時代の医術の著作から現れてくる、万物の自然 (universal Nature) という概念の広い背景においてのみ理解できる。」「ヒポクラテース学派の研究者たちは、どのようにしてフェシスというものの力を明らかにしたのだろうか？ これまでだれも、早期ギリシアの医術文献における自然という観念、それが、後の時代に対してはもちろん、あの時代の知的歴史の全体に多くの光を投げかけるであろうにもかかわらず、その体系的な研究をしようとしてこなかった。」「われわれはここで、プラトーンの『パイドロス』におけるヒポクラテースの描写を思い出してよい。彼が考えていたことは、われわれが自然についての有機体的見地と呼んでいるものであった。」「『パイドーン』においては、プラトーンは、初期の自然哲学者たちを、彼らが宇宙に内在する目的の要素—自然の有機体的見地と密接に関係している問題—を考慮していないことで、非難している。したがって、彼が自然哲学の中に探して甲斐なかったものを、彼は医学に見出したのである。」「もちろん、19世紀の自然科学と医学はギリシア医術をこの見地では見ていなかった。」「医者(の)の義務は、隠れた調和を、それが病気で乱されたときにとり戻すことである。健康のとき、自然は自らあの調和を生

み出す、もしくは、自然そのものは申し分のない調和 (the right proportion) である (*is*)。その調和や釣り合い (symmetry) という概念と、あの混合という概念 (that of mixture) は、密接に結びついているが、それ (= 混合という概念) は実に有機体を支配する多様な諸力の間のふさわしいバランス (equal balance) と言ってよいものを意味しているのである。自然はあの賢明な標準 (standard) に達しようと奮闘する (つまりそういうふうにならなければそれはそれ (= 自然) を述べなければならない) ; そしてその見地からすれば、いったいどうしてプラトンは力、健康、そして美を身体の ‘徳 (virtues)’ (*ἀρεταί*) とみなすことができ、またそれらのことを魂の倫理的な徳に対応すると話すことができるのか、を理解することは容易い。」「病気の症状—とくに熱—は、実に正常な状態がとり戻されていく過程の始まりである。その過程は身体自身によって始められ、そして医者がいなければならぬことは、自然治癒への本能的な衝動を助けるために自分が介入することのできる瞬間を注意して待つことだけである。つまり自然は、自らを助けるだろう。このことは、病気についてのヒポクラテース学説の第一の原理である ; 同時にそれは、その目的論的な根本原理のもっとも的確な表明である。」「二世代後に、アリストテレスは、技術は自然を模倣しその欠如を補うために考案された、とすることによって技術と自然との関係を定義した。この見解は、当然に自然はすべてに染み渡る目的をもっていると思っており、またそれ (= この見解) は、自然のなかに技術の模範を見るのである。」「後の自然哲学者たちは、(われわれが指摘してきたように、医学思想に影響されて) 自然における目的の問題を、全世界に内在する神の理性があらゆるものを意味深い仕方次第で秩序だててきたのだと仮定することによって、解決した。ヒポクラテース学派の人びとはあらゆるそれに類する形而上学的な仮定を避けた ; しかしそれでも彼らは、自然が無意識の目的をもって振る舞うことを称賛したのである。」「それ (= 古代の科学) は、自然におけるあの目的はいつも生き生きとした生命と関係していると考えたのであり、そして生き生きとした生命が医学の唯一の目的なのである。」「自然の無意識の推理力は、人間の意識的な ‘教養 (culture, Bildung)’ に類似するものと考えられている。その考えは、時折医術の著作に表れるソフィストたちの考え—パイデアーによる人間性 (human nature) の形成は農業や動物の飼育慣らしに対応する、というもの—よりもより意味深い。というのは、そんなふうと考えられているパイデアーは、外部から課せられる訓練やしつけにすぎないからである ; ところがヒポクラテースの見地によれば、それは、自然自身の目的的な活動における、無意識の、自発的な予備段階をもっている。その見解は自然をより理性的にし、理性をより自然なものにする。身体的な事象を説明するための精神的な類比というすばらしい使用は、その逆も同様であるが、同じ種類の知的な態度のおかげである。」

## 12. 目的論を基礎にする健康を維持する思想——一般人に向けて書かれた初期の論文「健康時の摂生法について」の特徴

「古典期においては、2、30年前までのどの時期よりも、医者は病人よりも健康な人びとにより関わっていた。健康を扱う医術の分野は *hygiene* (*τά ὑγιεινά* ヒュギエイナ) という一般的名称で通っていたのであり、その主要な関心事は ‘diet (食餌療法、ダイエット、養生法)’ であった—それは、ギリシア人にとっては、病人食の調整のみならず、人間の生活習慣の全体、とりわけ食物とその人に求められる活動を決定する規準 (the rules)、を意味していた。この故に、人間の有機体の目的論の概念に基づいて仕事をする医者に

とって、重要な教育的責務を引き受けるということは必然的であった。」「それ (=健康の面倒をみること) はもちろんいつも、平均的な人間の一日の重要な部分を占める、体育 (gymnastics) と結びついていた。体育活動自体は、衛生によい経験の長年の産物であり、身体とその働きの安定した管理を必要とした。体育トレーナーは、その指導を受ける者たちに自分たちの身体の手入れの仕方を助言する専門家として、医者に先行した。そして彼は、新しい ‘diet (食餌法・摂生法)’ の理論が精巧に作り上げられたとき、取って代わられることはなかったのである—彼はいつも自分の地位を医者と並んで維持したのである。」「論文 *On regimen in health* (「健康時の摂生法について」) は、素人が自分たちの日々の ‘diet 摂生法’ の適切な方法を選ぶのを案内するために書かれた。」「それはまだ、約百年後にディオクレースの著作のなかでそうなったほどには、高度に発達してはいなかった。ディオクレースは実際に、朝から夜までの一日の全経過を調整した、しかるにこの初期の著作は、夏と冬という両極端、それに春と秋という二つの季節の変わり目、にふさわしい食餌療法の変化の単にいくつかの描写をするだけである。」

### 13. 医学と哲学の新たな統合とパイディア概念の深化——「食餌法について」の執筆年代はアカデーメイアとイソクラテースの時代と推定される

「四巻本の大きな著作 *On diet* (「食餌法について」) は、異なる種類のものである。それは文字どおりの百科全書であり、それは、著者が言うには、この特別な分野のすでに豊富な文献をまとめる、また必要のあるところでは補充する、試みであった。彼は哲学者であった；彼は体系的な理論を好んだ；しかし彼をコンパイラーと呼ぶのは正しくない。」「われわれは、著者の、自分は多くの異なる影響を受けてきたが医者としてということにおとらず哲学者として普遍的であることを意図しているという主張、を受け入れるように本当に決心すべきである。」「ガレーノスは、その第二巻は、第一巻のさまざまな種類からなる哲学者と他の異質の構成要素にもかわらず、ヒポクラテースに値すると考えた。そしてたとえその多くがオリジナルではなく、その著者によって彼 (=ヒポクラテース) の資料から写し取られたものであるとしても、それでも彼 (=その著者) が、哲学と経験主義的医術との間の古い理論的論争を超えて進んできていること、そして熟慮して双方のこれらの要素を統一しようと試みていること、を認めないのは不可能である。」「…われわれの著者 (=「食餌法について」の著者) は、彼は4世紀には明らかに非常に一般的であったこれらの批評文にこたえようとしているので、滋養と身体的運動との適切な調和を主張するようにあのような気配りをしている。他の医者たちは医学の技術の ‘独立性’ を熱烈に主張してきていたのであった。しかしわれわれの著者は医術のはるかに広い概念をもっており、彼はそれ (=その医術の広い概念) にあのお考え (=医学技術の独立性のお考え) を適用しようとはしないのであり、なぜなら、と彼は言うのであるが、それぞれの個人にふさわしい滋養と運動との精確な割合を見出すのは不可能なのである。私はこのなかに、「古来の医術について」の著者に対する論争を見ないわけにはいかないのであり、というのはその著者の主要な理論がここですべて繰り返され、明確に反駁されているからである。この著者 (=「食餌法について」の著者) は、医療の技術は、それが個人とその必要の問題を解くことができないので、真の完全さに到達するのが妨げられている、という考えをもっている。彼は、医者は、もしトレーナーのように彼が自分の治療する個人をいつも目の前におくことができるならば、自らの理想により接近できるであろう、ということをとわ

ず認める気になっている。しかしそんなことは不可能である。」「彼は、大部分の医者たちがするように、病気が確固たるものになってしまってから始めるようなことを望んではいない。彼はそれゆえに、注視されるならば発病を防ぐことになるであろう、詳細な食餌法を完全を書く。これは *prodiagnosis* (προ-διά-γνωσις プロディアグノーシス：あらかじめの判定・診断) でもあり *prophylaxis* (προ-φύλαξις プロフュラクシス：あらかじめの守り・予防) でもある—(まさしく：eben) 彼自身の着想であるものである。」「第1巻で自らの一般的仮定とされるべき自然哲学の理論を定めたあと、著者は第2巻でさらに進んで、さまざまな気象や地域の健康に与える影響を、引き続いてあらゆる種類の野菜や食用動物の同様の影響をもっともささいなものまで叙述する。これは、文明化されたギリシア人が意のままにできた日常の食物のおどろくべき豊富さと多彩さを認識する機会をわれわれに与える。」「それは、彼の残りの論文とまったく同じように体系的である。」「われわれは、小論「食餌法について」はわれわれを(前)5世紀の外に連れ出すというだけではなく、はるかに4世紀の中へ連れていく、と結論せずにはいられない。このことを証明するものはいろいろある：言語、文体、そして内容、など。」「その著者を4世紀に置くことを助ける別の視点もある。それは、彼の、資料を体系的な種類と部類に区分する、際立った傾向であり、というのは、その方法は4世紀に盛んになったのである。」「…(前)5世紀にアリストテレスのものに非常によく似た体系的な動物学理論がほんとうに存在したということ信じるのは不可能である。われわれは、もしわれわれがそれをプラトンの時代に設定すれば、著作の体系によって引き起こされる、その謎をよく理解することができる。」「プラトンは自ら、自身の弁証法的な分類法の詳細な説明の箇所(Phaedrus 265 f.)、それ(=自身の弁証法的な分類法)はヒポクラテースの方法が手本にされるべきだと述べている。たしかに、彼(=プラトーン)はかつてその方法が人間以外の有機体に適用されたとは言っていないが、しかしプラトンの時代までに医学学派がそれを植物や動物にも拡張していたこと、また哲学者たちと医者たちがあの探究法に共通の関心をもったこと、は考えにくいことではない。」「一つの注目すべきことであるが、小論「食餌法について」は、ヒポクラテース全集の他のどんな著作よりもはるかに頻繁に‘soul 魂’ということばを使っている。それを他の著作に見出すことは、むしろ例外的なことである。このことは偶然ではあり得ない。」「ギリシア人は実際には、自分たちの思想自体が‘精神 soul’に集中するようになる前は、魂の夢見について、東洋の知恵も迷信も受け止める準備ができていなかった——そしてそのこと(=ギリシア人の思想自体が精神に集中すること)は、この独特の科学的で理論的な形式においては、4世紀までは起きなかった。その上、こうした新しい考えにもっとも感銘深い表現を与えたのは、アカデーメアであった。プラトンの魂に関する学説は、アカデーメアが魂の夢見への哲学的関心とその実際の意味を引き出す、源であった。若いころのアリストテレスは、いくつかの対話篇で、その問題を論じた。「食餌法について」を執筆した人物は、彼の考えはきわめて個性的ではあったが、夢の問題の論述において、アカデーメアによってなされた研究に影響を受けたのはもっともなことである。」「著作(=食餌法について)」の言語は、4世紀中期の方を、その初頭や初期のどの時期のものよりも、連想させる。イオーニア方言は4世紀全体を通してまだ書かれており、これらの、対照法や均衡のとれた節をもつ、凝った、しばしば長ったらしい文章は、ゴルギアースの時代よりもイソクラテース的な修辭法

の時代を示している。」「結局、この著の著者は、イソクラテースのように、自分の独創性に対する世評を非常に気にしているのである；そしてそんな心配もまた4世紀の特徴を示しているのである。』

#### 14. アリストテレス学派の哲学を摂取している医者ディオクレースの食餌法の理論

「別の著名な医者は、通常、4世紀の前半に位置付けられる：つまり、エウボイアのカリュストス出身のディオクレースのことであり、彼はアテーナイで働いたのであり、その基本的な考え方はヒポクラテースとシケリアーとの双方の医学派のものにきわめて近い。他の諸著作のなかで、彼は食餌法について有名な一つを書いた；その大きな断片が、皇帝ユリアヌスの侍医オリバシオス（オレイバシオス）によって編纂された医術論集のなかに保存されている。」「彼の文体は、「食餌法について」を書いたヒポクラテース学派の科学者と同様に、きわめて洗練されており、また彼の著作は、それが専門的著作であるにもかかわらず、純然たる文学であることを熱望している——このことは、4世紀における医学の知的地位と教育目的にとって意義深い事実である。しかし、それ（＝彼の文体）は修辭的ではなく、意図的に簡素である。その点で、おそらく彼はアリストテレスが導入して以降に広がった、科学的な文体についての新しい理想像の影響を受けている。」「われわれは、初期自然哲学がどのようにギリシア医術に影響したか、それから新しい経験主義的な医術が今度はどのようにプラトーンやアリストテレスの哲学に影響を与えたか、を見てきた。ディオクレースにおいては、彼は明らかにアテーナイの偉大な哲学学派に影響を受けているが、医学はもう一度、それは見返りに何かを与えるには与えるのではあるが、それが与えたよりもより多くのものを受けとる。典型的な一日を叙述するという方法によって適切な食餌法を説明することにおいて、彼は明らかにプラトーンとアリストテレスの思考法を真似ている——彼らはいつも人間の生活を *as a whole*（一つの全体として）考察し、正しい暮らし方の像ですべての人間が従うべき規範（the standard）をつくるのである。なるほど、食餌法についての他の著者たちも規準を持ち出す；しかし彼らは単に、‘あれこれをしなければならぬ’と言うだけであり、さもなければ、ある種類の食べものの身体への影響を述べ、読者に、自分自身（＝読者自身）の実際的な結論を引き出すことを任せる。ディオクレースは、その双方を回避する。その代わりに、彼はどんなときでも何が人間にふさわしく有益なのかを示す。4世紀には倫理も技術も、適切さという考え方（the idea of suitability）に支配されている。」「そのように、ディオクレースはアリストテレス学派の倫理学に深く影響されている：そうして、他の見地からであるが、彼はアリストテレスの論理学に依存している…。」「…しかし彼の一日の全計画は二つの固定点に基づいている：朝の運動（exercise）と午後の運動である。彼の生き生きとした叙述は、どのようにギリシア人の全生活（それは他のどんな国民のものとも似てはいない）が彼らの体育（gymnastics）を中心にして回転しているかを十分に理解させる。彼の食餌法の理論は、まさに、体育に使われるのではない、一日のあのすべての部分を精確な医術的処方によって調整するという、またそれ（＝一日のあのすべての部分）をその人の体育の日課と完全に調和させるという、推奨と見なされてよい。」「こういうことすべて（＝食餌法）の目的は、可能なかぎり最高の状態——一般的な健康にとっても、またあらゆる種類の身体の鍛錬にとっても、可能なかぎり永続する健康状態——に到達することである。ディオクレースはそう、何回か言っている。」「私たちは、ギリシアの医者たちが、

金持ちのためだけに書いたと想像してはいけない。同時代の哲学者たちも同じことをしたのである——彼らは、まったく暇のある人によって暮らされるべき *bios* (生活) というものを叙述し、それから諸個人に、この理想からそれぞれに引き下げるのを任せた。」

### 15. ギリシア的教養の本質としての「健康 (health, das Gesunde)」の思想

「…おそらく、(前) 4世紀のギリシア都市国家の市民によって送られた生活は、市民に、かつて人間によって送られた他のどんな生活よりも、自分の精神の教養と自分の身体の世界に使われるより多くの時間を許した。身体の世界の医術学説の実例は、ギリシアのポリスが、その民主的な形態においてさえ、一種の社会的な貴族政体であったということを示している；そして、それ (=ギリシアのポリス) が獲得した一般教養 (general culture) の高い平均的水準は、その事実に起因するのである。われわれの自身の専門化された生活様式によって生み出された主要な類型——商人、政治家、学者、労働者、あるいは農民——のたった一つもギリシア人の生活の枠組みにぴったりと合うことはないだろう。そうした類型がギリシアで発生してきていた限りで言えば、それら (=そうした類型) は当時でさえその様式の範囲外にあった。それにもかかわらず、ソクラテースの哲学とソフィストたちの論争の技術がどのように体育学校の中で (in the gymnastic school) 発展したかを理解することはむづかしくはない。」「プラトーンは三つの身体の徳——健康、強さ、そして美しさ——を魂の徳——敬虔 (piety)、勇氣 (courage)、節制 (temperance)、そして正義 (justice) ——と、一つの合唱を形成するように、結びつくものとして語る。それらはみな、同様に、世界秩序の均整、すなわち個人の身体的生活にも精神的生活にも反映される調和 (the harmony)、を象徴している。ギリシア人の医師とトレーナーが理解する体育 (physical culture) でさえ、精神的なことがらであった。それは、人間に一つの至高の規範 (standard) を課した——その身体的諸力の間に高貴で健康な均整を保持するということを。もし、そのとき、同等性と調和 (equality and harmony) が健康と他のすべての身体的な完全さの本質であるとするならば、そのとき 'health 健康' は、何か重大なことを意味するようになる——それは、全世界と全生活に適用される普遍的な価値基準 (a universal standard of value) へと成長する。というのは、その (=健康の) 根拠、つまり同等性と調和は、(この学説の基礎にある考え方によれば) 善い正しいもの (good and right) を産み出す諸力なのであり、しかるに食欲はそれ (=健康) を乱す。ギリシア医学はこの学説の根であり果実でもあったのであり、つまり、その学説からそれ (=ギリシア医学) は絶えず力と栄養を手に入れており、またその学説は、個人的、種族的な個性によって生み出される変化にもかかわらず、古典期における全ギリシア人の共通の見地なのである。医学がギリシア的教養においてそのような代表的な地位にまで高まった理由は、それ (=医学) が、直接的経験によってもっとも接近できる領域で、この根本的なギリシア人の理想の不可侵の重要性を、明瞭に印象深く、明らかにしたということであった。この高度な意味において、われわれは、ギリシア人の教養の理想 (the Greek ideal of culture) は健康の理想 (the ideal of Health) のことであったと言ってもよい。」

ロ) ギリシア医学をパイダイアー思想の根幹として見出すこととイエーガーの歴史研究方法

イエーガーは、英訳版第Ⅱ巻の序文 (1943年7月) で、「私は第Ⅲ巻で、人間の本性の

理論として医術を、それがソクラテースとプラトーンの教養 (paideia) の構造につよい影響をあたえていると考えるので、論じる気にさせられた。」の述べ、さらに「私のギリシア医術に関する章のための予備的研究はこの本の限界を超えて大きくなり、独立した著作として出版された (< Diokles von Karystos >。)」と説明している (本継続研究 (3) の< 訳文④ >)。このようにイエーガーは、パイデアー思想形成におけるギリシア医学が占める位置を資料文献に基づいて解明しているが、彼は、その医学史が明瞭にしていた「健康 (の維持)」の思想が、ソクラテースとプラトーンによって考究された魂の徳の思想的根拠になっていると言う。イエーガーはたとえば、ソクラテースについて、次のようにも書いている。

彼自身は (アリストテレースが正しく観察しているように) いつも帰納法で前進した; つまり彼の方法は、医術における事実在即する経験主義者のそれと同種である。かれの知識の理想は τέχνη (技術) であったが、それは治療の技術において、とくにそれ (= 治療の技術) が実践的な目的を念頭にもっていたから、典型的に体现されていた。あの頃は、厳密な科学のようなものは存在していなかった。その当時の自然哲学は不正確なものすべてであった。それゆえ、哲学の経験主義も存在しなかった。古代社会においては、経験が実在についてのあらゆる正確な知識の基礎であるとする主義は、医術に拠って、そして医術に拠ってのみ、主張された。そういうわけで、医学が知的世界において、今日よりもより高い、より哲学的な地位を保持したのである。同様に、その考えをわれわれの時代の哲学に伝えたのも医学であった。現代の哲学の経験主義は、ギリシア哲学のではなく、ギリシア医学の所産である。

(本継続研究 (10) II. 2. ソクラテースは「自然哲学」に批判的態度をとり、「自然科学 (医学)」の方法に共鳴した)

このようにイエーガーは、ソクラテースとプラトーン (さらにアリストテレース) の思想の核心部に医学との共鳴関係があることを明らかにしているが、このことはイエーガーのパイデアー研究の重要な成果なのである。

ところでイエーガーは、その研究方法に関して、「< Paideia パイデアー > は、この著書の題目であるが、単なる象徴的な名称ではなく、この著で提出されている実際の歴史的な主題の唯一の的確な名称である。もちろんそれは、定義することが難しいことがらであり、他の広範な概念 (たとえば < philosophy 哲学 >、あるいは < culture 文化 >) と同じように、それは一つの抽象的な空虚な言葉 (formula) の中に閉じ込められることを拒む。その完全な内容と意味は、われわれがその歴史を読み、それが自らを実現しようとする試みを追うときにのみわれわれに明らかになる。ギリシア人の言葉をギリシア人のことさらに使うことで、私は、それが現代人ではなく、ギリシア人の目で見えるということを暗示しようとしている。< civilization, culture, tradition, literature 文明、教養、伝統、文学 > あるいは < education 教育 > のような現代の表現を導入することを避けるのは不可能である。しかしそれらの一つも、ギリシア人がパイデアーで意味しようとしたことを本当に包含するものではない。」と述べている (本継続研究 (3) II. 3. < 訳文③ >)。あるいは、研究方法にかかわって、次のようにも述べている。

歴史家の役目は、我と自分の文化 (culture)、社会を完全に忘れて、ほかのもっと

生き生きとした世界の生活、感情、そして色彩に深く飛び込むために、またそのようにして、ちょうど詩人が自分の気質 (his characters) を生活の呼吸で充たしていくのとまったく同じ方法で、見知らぬ生活と馴染みのない感じ方の状態に考えてなるために、自分の想像力を使うことである。(同上<訳文④>)

パイデИАー思想の形成における古代ギリシア医学の重要性を浮かび上がらせたのは、イエーガーの上述のような意識された研究方法があったからだといえよう。実際、ギリシア古典には、ギリシア医学と対照されるくだりが頻繁に現れている。そうしてそのような対照のくだりに接するたびに、私たちには微妙な困惑感が生まれる。しかしこのイエーガーの研究によって、その問題が解消するのである。

なお古代ギリシア医学の意味をパイデИАー (教養・教育) 思想という角度から見出すことは、現代の分化し専門化した個別学問の概念や方法 (= これは現代の学問・文化の矛盾でもあるが、そして教養・教育は根底においていつもこの矛盾に対してしているのである) から古代ギリシアを見る、というやり方では困難であろう。そういうことから、イエーガーの古代学に関する並々ならぬ資質と素養が窺えるのである。

#### ハ) 日本における古典翻訳の前進について

本章を読み進めるにあたっては、多くの先行研究と翻訳に助けられている。ここでは、とくに大槻真一郎を翻訳・編集責任とする『ヒポクラテス全集』全3巻 (エンタプライズ、1985年、1987年、1988年) のことに触れておきたい。ヒポクラテスの全集の邦訳には貴重な積み重ねがあるようだが、ギリシア語からの全訳は、1980年代後半という、比較的最近のことに属する (本継続研究 (5) I. 3. <注記と考察> (1))。また、例示的な意味でということであるが、岩波書店の『アリストテレス全集』は、1968年から1973年に出され、さらに、2013年より『新版アリストテレス全集』として刊行が進行中である。このように、(古川晴風編著『ギリシャ語辞典』大学書林(1989年)の出版や、京都大学学術出版会の「西洋古典叢書」の蓄積、同出版会からの松原國師著『西洋古典学事典』(2010年)の刊行を含め) 日本における古代思想研究の条件が高まりつつあり、古代学の素人がイエーガー著を読む社会的条件が生まれてきている。

### Ⅲ. 「イソクラテース」(英訳版第4編の2～6: 46p～155p)

#### 2 イソクラテースの弁論術とその教養理念 (その1)

第Ⅲ巻、第4編: 46p～70p

#### 1. 哲学 (プラトーン思想) と弁論術 (イソクラテース思想) との戦いが見せる古典期における教養思想の形成——本書『パイデИА』の主題の再確認

<訳文> 46p～48p

(紀元前) 4世紀のギリシア文学 (literature, Literatur) は、真のパイデИАーの特質 (character, das Wesen 本質) を決定しようとする大きく広がった (知的: geistigen) 格闘を映し出している; そしてその中で、弁論術の (of rhetoric, der Rhetorik) 指導的な代



表者であるイソクラテースは、プラトーンとその学派に対する古典時代の対立を具現する。このとき以来、哲学と弁論術の、それぞれに教養のよりよい形態 (the better form of culture, die bessere Form der Bildung) であると主張する対抗は、古代文明 (ancient civilization, der antiken Kultur 古代文化) の歴史を通してライトモチーフのように進む。その対抗のすべての局面を述べることは不可能である：第一には、それはかなり反復が多く、またその対立の側の主唱者は、いつも非常に興味深い人物であるというわけではなかった。〈1〉いっそう重要なことは、それゆえ、プラトーンとイソクラテースとの間の対抗 (the conflict, die Gegnerschaft) である——つまり、哲学と弁論術との間の戦い (war, den Wettstreit 競い合い) の世紀における最初の対決 (battle, die [=die Gegnerschaft]) である。その後は、その戦い (war, der Gegensatz 対立) はしばしば、いずれの側も何ら純粋な生き生きとした力 (genuine vital force, wirklichem Lebensgehalte 現実の生活の意義) をもたない、単なる学術的な口論に墮していくことになったのである；しかしその初めは、戦う党派は、ギリシア国民を本当に感動させる力と (彼らの) 必要 (the truly moving forces and needs, die wahrhaft bewegenden Kräfte und Bedürfnisse) を代弁していた。それ [=その戦い, ihr Dialog その会話] が行われた領野は、政治的場面のまさに中心であった。このことが、それ [=その戦い] に、真に歴史的な事実の生き生きとした彩色と、われわれのそれに対する関心をいつまでも生き生きとさせる大きなスケール (the large sweep, den großen Stil) を与えるのである。振り返ってみると、われわれは、この対抗 (conflict, Kampf 闘い) において、あの時代のギリシア史全体の本質的問題 (the essential problems, die eigentlich entscheidenden Probleme 真の決定的な問題) が象徴されているということを理解する。

古とおなじように今日も、イソクラテースは、プラトーンのように、彼への賞賛者と彼の解説者をもつ；そしてルネサンス以来、彼が人文主義の教育方法 (the educational methods of humanism, die erzieherische Praxis des Humanismus 人文主義の教育実践) に、他のいかなるギリシアやローマの教師よりもはるかに大きな影響を及ぼしてきたということは、疑いないことである。歴史的に、彼を (現代の何冊かの本の題扉で使われていることばで) ‘人文主義的教養 (humanistic culture, humanistischen Bildung)’ の父と評することはまったく正しい——ソフィストたちがその称号を実際には要求することができない以上は、そしてわれわれ自身の教育学の方法と理念 (pedagogic methods and ideals, Pädagogik 教育学) から見れば、一つの直系が、それがクインティリアヌス<sup>(1)</sup>やプルータルコス<sup>(2)</sup>に帰ると同様に、彼に帰着する以上は。〈2〉しかし、近代の学校の人文主義 (academic humanism, dem Schulhumanismus) によって規定されるような、その考え方 (view, Perspektive 観点) は、この本の態度とは大いに異なる——というのは、われわれのここでの仕事は、ギリシア的パイデイアの全発達を確かめ、その諸問題とその意味に内在する複雑さと対立 (antagonisms, Gegensätzlichkeit 矛盾) とを研究することなのである。〈3〉現代の教育者によってしばしば人文主義 (humanism, „Humanismus“) の本質と見なされていることは、主として古典期の教養 (classical culture, der antiken Bildung) における弁論術的血統の続き (a continuation of the rhetorical strain, den rhetorischen Strang 弁論術の筋) だということに気づくことは重要なことである；しかるにヒューマニズム (humanism, des Humanismus) の歴史は、それよりも、はるかに広く豊かなことがらであり、

というのは、それ [= ヒューマニズムの歴史] は、ギリシア的パイデアーの——ギリシアの哲学と科学 (philosophy and science, Philosophie und Wissenschaft) によって及ぼされた (exercised) 世界中に広がっている影響も含んで——あらゆる種々の生き続けているもの (survivals, die Fortwirkung 生き続けるもの) を包含しているのである。〈4〉この見地から、真のギリシア的パイデアーの理解 (an understanding, die Bessinnung 熟考) は、同時に、近代の学校的な人文主義の批評 (a criticism of modern academic humanism, Selbstkritik des gelehrten Humanismus der neueren Zeit 近代の学識的な人文主義の批判的な自己検証) を必然的に伴うということは明らかである。〈5〉他方、ギリシア文明 (Greek civilization, der griechischen Kultur ギリシア文化) における哲学と科学の位置と本質は、全体として、それらが真の教養の形式 (the true form of culture, der wahren Bildung des Menschen 人間の真の教養) として受け入れられるために他の知的な活動の類型 (types, Formen) と対抗するのが見られるまでは、適切に評価され得ない。結局のところ、双方の対抗者、つまり哲学と弁論術は、詩歌、つまり最古のギリシア的パイデアー、に源を発している；そしてそれら [= 哲学と弁論術] は、そこ [= 詩歌] にあるそれらの源と関係なしには理解され得ない。〈6〉しかし、教養の優位 (the primacy, den Primat) をめぐる古い闘いが徐々に哲学と弁論術とのどちらに価値があるかをめぐる論議へと狭くなっていくにつれて、古代ギリシアの、体育訓練と ‘musical (文芸的)’ 教養 (gymnastic training and ‘musical’ culture, der gymnastischen und musischen Bildung 体育と文芸の教養) との共同 (partnership, Zweiheit 二元性) がついに非常に低い水準へと落ちてしまった、ということが十分に明瞭となる。<sup>(4)</sup>

プラトンの『プロタゴラス』<sup>(5)</sup> や『ゴルギアース』<sup>(6)</sup> をちょうど読み終えた者には、ソフィストたちや雄弁家たちの教育学説が基本的にある時代遅れの (outworn, überwundener 乗り越えられた) 考え方であったということは、明白に思える；そして、もしわれわれがそれを、哲学によって提示された高遠な (lofty, idealen 理想的な) 主張——これからは、すべての教育とすべての教養は (all education and all culture, alle menschliche Bildung und Kultur) 最高の価値の知識 (the knowledge of the highest values, das Wissen von den höchsten Werten) にのみ基づくべきであるという主張——と対照するならば、それは事実時代遅れ (absolote) であった。しかも (われわれがギリシア史の後の世紀の最初の一瞥で見えてきたように〈7〉) 古い教育の型、つまりソフィストや雄弁家の方法は、克服し難く、その対抗者 [= 哲学者の方法] の横で活発に生き続けていたのであり、また事実、ギリシア人の精神生活に対する最も大きな影響力の一つとして指導的地位を維持し続けていた。おそらく、プラトーンがそれ [= 古い教育の型] を攻撃しつくす悩ませる残酷な軽蔑は、部分的には、己の分をわきまえる限りは攻略しがたい、そのような敵との交戦中の、征服者の感情によって説明され得よう。われわれにとって、もしわれわれが彼の攻撃をただソクラテースの世代の、彼 [= ソクラテース] が忌み嫌った教養のタイプ (the type of culture which he loathed, jene Bildung ああ教養) の具現と見なされる、偉大なソフィストたちだけに向けられていると考えるならば、彼 (= プラトーン) の憎悪の激しさ (the violence of his detestation, Platos Leidenschaftlichkeit プラトーンの激情) を理解することは困難である：その偉大なソフィストたちとは、プロタゴラス、ゴルギアース、ヒッピアース、<sup>(7)</sup>プロディコス、<sup>(8)</sup>たちのことである。彼が対話篇

を書いたとき、これらの人物は死んでいたものであり、しかも、あの目まぐるしい世紀においては半分忘れられていたのである。その著名なソフィストの有力な人物を冥界から同時代の人びとへともう一度呼び出してみせるということは、プラトーンのあらん限りの手腕 (art, Kunst) を必要とした。彼が、彼ら [= 著名なソフィストたち] を戯画化して描いてみせたときに (その戯画はそれなりに、彼 [= プラトーン] の理想化したソクラテース像に劣らず不滅である)、新しい世代が成長していたのである；そうして彼は、彼の先輩たちだけではなく、彼ら、つまり彼の同時代者たちを攻撃していたのである。われわれは、彼が描く敵対者のなかに、彼と同時代の注目に値する人物用の単なる仮面を見るということまでする必要はない；それにもかかわらず、ソフィストたちについての彼の描写には、多くの同時代の特徴がある。そして、一つの絶対的に確かな事実がある：プラトーンは、死者たち、つまり歴史的な化石とは決して論議はしていない。

### <注記と考察>

(1) キンティリアヌス：後30/35年頃～後95/100年頃。ローマの修辞学者、弁論術師。

イエーガーの論述を理解するために、松原著の説明の一部分を下に引いておく。

「彼の演説や論文はことごとく失われたが、体験に基づいて書かれた大著『弁論家の教育 *Institutio Oratoria*』全12巻 (95頃公刊) が現存する。この作品は修辞学に関する体系的な提要で、技術的な論議のみならず、全人格的な人間形成を目指す優れた教育論をも展開、徳性の涵養を説き古典的教養を重視した点で高く評価される。とりわけ幼年期の初等教育を重んじ両親や家庭の影響、教師の選択、学校教育の必要、等々を詳細に論述しており、ルネサンス期の人文学や近代ヨーロッパの教育学者らに大きな影響を与えた。当時流行の技巧にはしる弁論を墮落したものと見なし、キケローを範とする明晰・簡潔な文体を称揚、また第10巻ではギリシア・ラテンの諸作家を抜粋引用しながら批評を加えて後世に貴重な記録を残している。」

(2) プルータルコス：後46年頃～後120年以降。ローマ帝政期のギリシア人著述家・伝記作家。松原著によれば、「驚くべき多作家で、著作目録には227 (正しくは260) 部に及ぶ書物が掲げられており、現存する作品も量的にはラテン語のキケローと並んで古典作家中では第一級である。またその内容も、哲学・宗教・倫理・文学・心理・音楽・天文学・政治、等々人事百般にわたり、全体の約三分の一が今日残されていて、伝記と倫理的随筆集とに大別される。」という。その『対比列伝』と『倫理論集』が後世に与えた影響は重要なので、この二つについての松原著の説明を下記に、抜粋して引いておく (…は略した部分)。

1. 『対比列伝…』 (いわゆる『英雄伝』、105～115頃)。類似点のあるギリシア人とローマ人 (例えば、テーセウスとロームルス、アレクサンドロス大王とカエサル、デーモステネースとキケロー) を対比させた伝記23組46人、および単独の伝記4篇が存在する。「私は歴史ではなく伝記を書く」と称して、人物の性格を重視し、私生活中の言動を詳細に記載。数々の面白い逸話や生き生きとした描写ゆえに、興味深い読物となっている。アリストテレス派の流儀による叙述で、偉人たちの道徳的側面に重点を置いているが、悪徳や奇癖をも逸してはいない。今日失われた多数の古文獻を引用している点で貴重視されるほか、フランシス・ベーコン、シェイクス

ピア、ドライデン、モンテスキュー、ルソー、さらにフランス革命の闘士たちやナポレオン、フリードリッヒ大王、ゲーテ、シラー、ハイネら近世以降のヨーロッパ人に愛読され、計り知れない影響を後世に及ぼした点で重要である。

2. 『倫理論集…、(ラ) モーラーリア…』非常に広範囲に及ぶ講義や随筆の集成で、今日78篇の作品が伝存する。若い頃の弁論術の習作から本格的な哲学論文まで内容は多岐にわたり、「鶏が先か卵が先か」とか…あらゆることを論じている。代表的な作品としては、「饒舌について」…といった処世訓的なもの、…「食卓談集」…といった雑談集、「デルポイの神託が衰えたこと」…といった宗教関係文書が挙げられるが、その他、動物や天体についての自然学的著作、アカデメイア派の立場からストア派・エピクローロス派に反対する哲学的著作、教育や政治的著作にも見るべきものがある。…著作はビザンティンの学者に保存され、ルネサンス期に西ヨーロッパへ伝わり、アミヨの仏訳によって紹介されて以来、モンテーニュをはじめ万人に愛読される書物となった。

- (3) プラトンの教養理念ではなく、イソクラテスのそれに、その後の西欧における(人文主義的)教養思想の源流を見ることは、通説的なことと言ってよいだろう。たとえば、廣川洋一はその著『イソクラテスの修辞学校——西欧的教養の源泉』(講談社学術文庫、2005年、1984年に岩波書店から出版されたものの文庫化)の「序の章」において、下記のキケローの言葉を引用しつつ、次のように述べている。

われわれは人間と呼ばれている。だが、われわれのうち、人間性にふさわしい学問によって教養を身につけた人びとだけが人間 *homines esse solos eos qui essent politi* なのである (Rep.1.28)

と述べたキケローの言葉は、ギリシア人の教養・教育への意欲がローマ人のうちにもはっきりと受け継がれていたことをなによりも雄弁に語っている。そしてここにいわれる「人間性(フーマニタース)にふさわしい学問 *propriis humanitatis artibus*」は、文学・修辞学・歴史・哲学をその内容とするものであった。ここでの哲学は、プラトン・アカデメイアが実践していた精緻な数学的・論理的形而上学ではなく、全ての面で最も人間的な人間であること、そして自分以外のすべての人びととの関係において人間的であることを意欲するキケローにとって、それは、むしろ広く人間の行為あるいは人間社会にかかわる道徳(哲)学を意味した。

廣川はこのように述べ、上述文への注記として、「それは、イソクラテスの倫理学・政治学的関心を含む〈ピロソピアー〉に近く、またイソクラテス、キケローらの影響の下に成立するイタリア・ルネサンスのヒューマニズムにおける人間の哲学とほぼ内実を等しくするものといえよう。」と述べている。

なお廣川の著書に加え、小池澄夫訳の『イソクラテス 弁論集1』が1998年、『イソクラテス 弁論集2』が2002年に出版された(京都大学学術出版会)ということもあり、近年の教育史、教育思想史の研究では、イソクラテスは西欧教養思想の文脈でより詳しく論述されるようになっている(例えば、今井康雄編『教育思想史』有斐

関アルマ、2009年、教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000年(増補改訂版2017年)、など)。ただし扱われている思想史の対象は、なお研究課題であるというべきだろう。

- (4) イェーガーは、「パイデアーとしてのギリシアの芸術」の章において、「…ギリシア的教養はいつも、精神ばかりではなく身体の教養でもあり続けていた、という事実があった。その実態は、早期のギリシア人の教育を作っている二元的な制度に体现されていた——つまり体育と‘music’ (Musik) である。」と述べているが(本継続研究(5)Ⅱ. 1.)、教養論議が哲学と弁論術との優位性をめぐる論争へと狭まっていくにつれて、古代ギリシアの教養観にある体育訓練と文芸的教養との共同関係が見失われていった、と述べている。
- (5) プロータゴラス：前490/485年頃～前420/400年頃。ギリシアの哲学者でソフィストの始祖とされる。「ペルシア戦争後のギリシアで初めて自らをソピステース sophistes (知恵の教師) と称し、高額の授業料とひきかえに弁論術などの諸学問を教えた。」という。また「30歳頃からソフィストとしての活動を開始し、40年あまりにわたってギリシア各地の都市を巡歴、とりわけアテーナイへは頻りに訪れて(前451～前445、前432、前422、前415)、ペリクレスやエウリーピデースら著名人と親しく交わり、非常な名声を得た——彫刻の名手ペイディアースをはるかに凌ぐ大金を儲け、令名は死後もなお轟いたという——。」ということである。さらに、「[人間は万物の尺度である。在るものについては在ることの、在らぬものについては在らぬこと] (『真理論』’Αλήθεια の冒頭) と述べて認識の相対性を説き、絶対的な真理の存在を否定。当時の民主政治下において各人が自説を雄弁に主張するための“弁論術 (レートリケー) rhetorike” を伝授し、一般市民に多大な感化を与えた。その反面、「弱き論を強くする詭弁という武器で論争家を武装させた最初の人物」として後世からは非難されている。」という。また「プラトンの対話編『プロータゴラス』では、彼は率直で温厚、誠実な人物に描かれており、また知識を教えて授業料を取った最初の人であるところから、「有料の講義 (ロゴス)」と世人から渾名されたという。」ということである。(松原著)
- なおプロータゴラスとプラトーン (前429/427年頃～前347年 5 月頃) の活躍時期との年代的関係は、イェーガーが指摘しているとおりであり、下記のゴルギアース、ヒッピアース、プロディコスもほぼ同様である。
- (6) ゴルギアース：前485年頃～前380年頃。ギリシアのソフィストで弁論術の大家。本継続研究(6)Ⅱ. 3 (→9) の<注記と考察> (2) を参照のこと。
- (7) ヒッピアース：前481年頃～前411年頃。ギリシアのソフィストで、「プロータゴラスやソークラテースの同時代人。博識の大学者で、政治学・数学・天文学・音楽・歴史・文法・詩歌、など諸学に通じ、教師・弁論家としてスパルター、アテーナイなどギリシア各地を巡歴、大いなる財産と名声を築いた。驚嘆すべき記憶力に恵まれ、ソフィストとしてシケリアー (現・シチリア) 島へ赴き、そこにいた老プロータゴラスの向こうを張って多額の収入を得たことは有名。」ということである。また「著作はわずかな断片しか残っておらず、むしろプラトンの対話篇『ヒッピアース (大)』と『ヒッピアース (小)』の話者としてよく知られている。」という。(松原著)

(8) プロディコス：前470/460年頃～前399年以降。ソフィストで、「…外交使節として各地を旅し、アテーナイなどで高額の授業料（50ドラクメーという）を取って弁論術や言語学を教え、ソフィストたる名声を高めた。単語の意味の厳密な区別と正確な用語法を主張し、その講義にはソクラテースやエウリーピデース、イソクラテースらも列なったという（ただし金欠状態のソクラテースは1ドラクメー分しか聴講できなかったと伝えられる）。」ということである。（松原著）

## 2. アテーナイの政治的、社会的、道徳的危機に立ち向かおうとするイソクラテースの弁論術の思想——その形成とソクラテース、プラトーンとの諸関係

<訳文>48p～51p

詭弁法 (sophistry, die Sophistik) と弁論術 (rhetoric, Rhetorik) がいかに有力で活力に満ちていたかを、彼 [= プラトーン] がそれらと戦い始めたときは、イソクラテース<sup>(1)</sup> という人物ほどに示すものは他に無かったのであるが、その彼 [= イソクラテース] はその生涯の仕事 (his career, als Erzieher und Lehrer 教育者ないし教師として) に、実際には『プロータゴラス』と『ゴルギアース』が書かれたあとに、就いた。<8>彼が最初からプラトーンとソクラテース学徒仲間の主張と競い、彼らの攻撃に対してソフィストの教育 (sophistic education, der sophistischen Bildung) を擁護したということは、とくに興味深いことである。このことは、彼が、そのような批判は自分の位置を深刻に揺るがすものではないという確固とした自信をもって書いていた、ということの意味する。彼は実際に本物のソフィストであった：もちろん、教育におけるソフィスト的運動 (the sophistic movement in education, der sophistischen Bildungsbewegung ソフィスト的教育運動) をその完成点段階にもってきたのは彼であった。伝記の伝統は彼を、プロータゴラス、プロディコス、そしてとくにゴルギアースの門下生として描く；そしてギリシア時代の考古学者たちは、彼 [= イソクラテース] の墓石にこれらの関係の第三の証拠を見出したのであって、その墓石は、彼ら [= 考古学者たち] がゴルギアースであると鑑定する、天球儀を指さす姿を記していた。<sup>(2)</sup> 別の伝承は、イソクラテースがテッサリアーの偉大な弁論家 (the great rhetor, Gorgias ゴルギアース) とともに学問研究していたと断言した——おそらくペロポネネーソス戦争の終局面のことである。<10>プラトーンも、彼の『メノン』で、ゴルギアースの教師としての経歴のある部分はテッサリアーで過ごされている、と述べている<11>：新しい教養 (the new culture, der neuen Bildung) がギリシアの周辺地域にさえ浸透していたという事実の興味深い証拠である。イソクラテースの、彼をほとんど一夜にして有名にした、最高に偉大な著書『民族祭典演説』は、ゴルギアースの *Olympicus* に酷似している (closely resembles, an…unmittelbar anknüpfen…を直接に受け継いでいる)<sup>(3)</sup>；彼が、同じ (重要な：bedeutenden) テーマ——ギリシア人に向けての国家的に団結するようにとの呼びかけ——を扱いたいへん高名な著述家 (such a celebrated author, dem Meister 大家) と競うことを熟慮して選んだという事実は、ギリシア人の慣例によれば、彼がゴルギアースの弟子であること (pupil, Schülerschaft 弟子の身分) を自認していることの証拠である。さらにその事実に対する主要な証明は、彼が弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) ——すなわちソフィスト的教養 (sophistic culture, der sophistischen Bildung) の、もっとも实际的でいちばん純理論的 (theoretical, theoretischen

Charakter) ではない型——に振り向けた際立った姿勢である。彼は自分の人生をとおして、ゴルギアースのように、演説の技術ないし技能 (the art or craft, die Kunst 技芸) (λόγων τέχνη) を教えることを目指した；<sup><12></sup>しかし彼は‘ソフィスト’という肩書 (the title ‘sophist’, den Namen Sophist ソフィストという名称) をただ理論家たち、彼らの専門的な関心がどのようなものであれ、だけに適用することを好んだ。彼はそれ [= ‘ソフィスト’ という肩書] を、中でも、その名 [= ‘ソフィスト’ という肩書] の評価を大いに傷つけていたソクラテースと彼の門下生たちに向けて用いた。イソクラテースは、彼自身の考え方 (his own ideal, seine eigenes Ziel 彼自身の目的) を ‘philosophy 哲学’ と称した。このように彼は、プラトーンによって与えられた二つの言葉の意味を完全に逆転させた (inverted, vertauschte 取り違えた)。今日、プラトーンの ‘philosophy 哲学’ の定義 (definition, Sinngebung 意味づけ) が何世紀もの間あまねく受け入れられてきていることを思えば、イソクラテースのやり方は単に気まぐれな考え (whim, Willkür 気まま) であったように思える。しかし実際はそうではなかった。(というのは：denn) 彼の時代においては、これらの概念はまだ発展途上 (developing, in vollem Flusse 流動の最中) であったのであり、まだその究極的な形へと最終的に固まっていたとはなかった。ソクラテースとその門下生たちをプロタゴラスやヒッピアースとまったく同じ程度に ‘ソフィスト’ と呼ぶときに；そうして ‘philosophy 哲学’ を一般の知的な教養 (intellectual culture in general, aller Art von allgemeiner Geistesbildung 一般の知的教養の全技術) <sup><13></sup>、それは例えばトゥーキュディデースにおいても持っている意味なのであるが、を意味するように使うときに、一般的な言語慣用 (the general idiom, dem allgemeinen Sprachgebrauch) に従ったのはプラトーンではなくイソクラテースなのであった。彼はことによれば、(ペリクレーズがトゥーキュディデースにおいて語るように<sup><14></sup>) 全アテーナイ国家 (the whole Athenian state, des ganzen athenischen Volkes 全アテーナイ人民) の特徴点はその精神なことからへの関心 (its interest in things of the mind, das Streben nach höherer Geisteskultur より高い精神的教養をめざす努力)、φιλοσοφείν (ドイツ語版：φιλοσοφία)、である、と言ったかもしれないのであり、事実彼は『民族祭典演説』において大体そのようなことを言っているのである。アテーナイは、と彼は (そこに：dort) 書いている、教養 (culture, die Bildung, die Kultur) (φιλοσοφία) を生み出した——そして彼は明らかに、プラトーンないしソクラテースの周りに集まった頭の切れる弁証家たち (dialecticians, Dialektikern) の小グループよりも、全共同社会 (the whole community, den Charakter der Gesamtheit すべての人びとの性質) のことを考えている。<sup><15></sup>彼が目指していたことは、プラトーン主義者たちによって説かれたような、ある特定の主義ないし知の獲得の特別な方法とは対比される、共通の教養 (universal culture, die allgemeine Bildung)<sup>(4)</sup>であった。このようにして、‘哲学’ の肩書 (the title ‘philosophy’, das Wort Philosophie 哲学ということば) の所有権に対して二つの側からなされた要求に、また敵対者によってその語に与えられた非常に異なる意味に、そこに、教育と教養 (education and culture, der Bildung 教養) の領域における指導権に対する弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) と科学 (science, Wissenschaft) との張り合いが象徴されている。<sup><16></sup>

イソクラテースは、したがって、ペリクレーズ時代に隆盛したソフィスト的かつ弁論術的な教養 (the sophistic and rhetorical culture, der sophistischen und rhetorischen

Bildung) の、戦後 [=ペロポネネソス戦争後] における代表者 (representative, der Erbe 後継者) であった。しかし彼は、はるかにそうしたもの以上の存在であった。彼をそうしたものにすぎないと思えることは、彼の人格 (personality, Persönlichkeit) の最良のもっとも彼らしい面を無視することになる。彼が弁論術と実際の政治の重要性を大げさに表現しながら、また単なる詭弁的理論を背景に押しやりながら強調点を振り分けるといふ、その独特な方法は、彼の、新しい教養 (the new culture, der neuen Bildung) に対するアテーナイ人の感じ方 (attitude, die Stimmung) についての、鋭敏な感受性を示している。それ [=新しい教養] は、彼の少年期と青年期の間に、彼の生まれ故郷の町アテーナイにおいてめざましい成功を遂げた；しかしそれは激しく論議もされていた。彼はその [=新しい教養] の門弟だとかその旗手だとか表明した最初のギリシア人ではまったくないのであるが、それ [=新しい教養] は、彼がそれに真にアテーナイらしい装いを与えるまでは、本当の意味でアテーナイに取り入れられることはなかった。プラトーンにおいては、ソクラテースと論争する雄弁家 (rhetors, die Rhetoren) とソフィストは、彼らが異邦人であり、したがってアテーナイとアテーナイ人の本当の問題を理解していないという理由だけで、いつも不利な立場にある。彼らがいれば輸入される既製品のような‘出来合いの輸入される (imported ready-made, fertig importierten)’ 知識を携えて閉鎖的なこじんまりとしたアテーナイ社会に入ってくる時、彼らはいつも部外者であるように見える。<sup><17></sup> もちろん彼らは皆、教育を受けた人ならばだれにも理解されるような同じ国際語で話す。しかしそれはアテーナイの言外の響きを少しも持っていない。それに彼らは、それなくしてはアテーナイの世界で十分な成功をなしとげることができない、何気ない気品や社会的な安らかさ (the social ease, ungezwungene Leichtigkeit des Umgangs のびのびとした交際の容易さ) を欠いている。彼らの広い教養 (culture, ihre Bildung) と彼らの信じられないほどの技巧は感嘆して迎えられるが、しかし深い意味においてそれらは効果のないままである——少なくともさしあたりは。新しい要素は、それが有効性をもつようになる前に、この比類のないアテーナイ国家を特色づける極めて独特な生活様式 (way of life, Lebensprozeß 生活過程) と融合しなければならなかった；そして、イソクラテースのような、自分の都市 (his city, der Eigenart…seines Volkes 自国民の特性)、及びそのときに都市 [=自国民] が直面していた危機 (the crisis, Schicksalslage 運命的状況)、の本質に十分に気づいているようなアテーナイ人でなければ融合をもたらすことはできなかった。弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) は、その [=弁論術の] まさに本質に深い変化を引き起こすことになった戦中・戦後の時代の恐るべき事態、の影響の下にアテーナイに定着したのであるが、それは弁論術がそこ [=アテーナイ] に初めて現れてからまるまる一世代後のことであった。同時にそれ [=弁論術] は、ソクラテースによって口火を切られた道徳的改革 (the moral reformation, der sittlichen Reformation) によって、<sup><18></sup> また、イソクラテースの青年期および成年初期をとおしてアテーナイ国家を震撼させた重大な社会的危機によって、深く影響を受けた。ペリクレス体制の遺産を受け取る (使命を授かった: die berufen war) 新しい世代は、途方もなく困難な職務 (tasks of enormous difficulty, ungeheure Forderungen 途方もない要請) を目の前にしていることに気づいた。イソクラテースにとって、彼の時代の政治的、倫理的思想 (ideas, Ideengehalt 思想内容) をもっとも完全に表現でき、それを当代の全アテーナイ人の知的素養の不可欠な資質



(part of the intellectual equipment of all contemporary Athenians, Allgemeingut 一般常識) に成し得る、知的な形式 (the intellectual form, die geistige Form) だと思われたものは弁論術であり、プラトンの意味における哲学ではなかった。その [= 弁論術の] 目的のこの新しい考えによって、イソクラテスの弁論術の教授 (teaching, Wirksamkeit 有効性) は、戦後のアテナイの偉大な教育運動 (educational movement, Erziehungsbewegung) ——そこにアテナイ国家を改革し若返らせようとする彼の若いころの努力は全て必然的に流れ込むように運命づけられていた——の不可分の要素となって出現した。

<注記と考察>

- (1) イソクラテス：前436年～前338年。アテナイの修辞学者・政治評論家で、「ゴルギアスやプロディコスらソフィストに学んだのち、ペロポネネーソス戦争（前434～前404）で財産を失ったため、職業的な法廷弁論代作者(ロゴグラポス) logographos となり、前392年頃、アテナイに修辞学の学校を設立。100人を下らぬ門弟を有料で教育し、たちまちにして名声と富を得た。博い教養をもって弁論術を教え、プラトーンら哲学者の学園に対抗、イーサイオスやリュクールゴス、ヒュペイレデス、アイスキネス等々優れた子弟を半世紀余りにわたって送り出した。」という。また「ローマの雄弁家キケローも、イソクラテスの教養主義的教育論から少なからぬ感化を蒙っている。」とされる。(松原著) 本継続研究(9)のⅡ. 13. <注記と考察> (15) を参照のこと。

なお、プラトンの対話篇『プロタゴラス』『ゴルギアス』は前期「対話篇」に属するとされている。《原文注記》8. を参照のこと。

- (2) この叙述に関し、イエーガーは《原文注記》9. で、「偽ブルータルコス『十大弁論家列伝』」838dを指示している。それは「イソクラテス」の項目であり、その指示された部分は次のとおりである(伊藤照夫訳『ブルタルコス モラリア10』京都大学学術出版会、2013年)。

「…イソクラテス自身の墓には、高さ30ペーキュスの円柱状の墓表が建てられてあり、その上にシンボルとして7ペーキュスのセイレーンが立っていたが、現存しない。すぐ近くには彼の銘板もあって、これには詩人たちや彼の師匠たちが描かれ、その中には天球を見つめるゴルギアスもいて、その傍らにイソクラテスが立っている。…」

- (3) 「偽ブルータルコス『十大弁論家列伝』」では、イソクラテスの『民族祭典演説』に関し、「これをレオンティノイのゴルギアスとリュシアスから剽窃したものと主張する向きもある。」と述べられている(伊藤訳)。なおこの箇所については次のような訳注が付されている。

「ピロストラトス『ソフィスト列伝』第1巻505によれば、旧師ゴルギアスが同一のテーマで論じた労作からの寄せ集めだという。」

また『イソクラテス 弁論集1』(京都大学学術出版会、1998年)の訳者である小池は、「解説」で次のように説明している。

「前392年、イソクラテスの旧師ゴルギアスがオリュンピア祭典で、コリントス戦争の終結とペルシア征討を訴える大演説を行なう。イソクラテスが10年以上の

歳月をかけて完成する畢生の大作『民族祭典演説』の構想執筆はこの頃に着手されている。」

- (4) universal culture (die allgemeine Bildung) は、「ある特定の主義ないし知の獲得の特別な方法」との対比において使われているので、「共通の教養」と訳しておいた。この場合の universal (allgemein) は、「世間一般の、万人の、共通の」という意味合いになろう。

### 3. イソクラテースは弁論術の教師としての汎ギリシア主義の理想を掲げる——弁論術に政治的、道徳的な内容を見い出していく

<訳文>51p~54p

このこと (this, dieser Wendung この転回) を引き起こした要因はきわめて多様であった。イソクラテースは、彼の語法と文体の熟達にもかかわらず、天性の雄弁家 (orator, Redner) ではなかった。しかもなお、本質的に、アテーナイの民主制 (the Athenian democracy, der athenischen Demokratie) はまだ、どんな人も弁論の熟達者でない限り実効性のある政治的な力になり得ない、という性質のものであった。彼は自ら、身体的に虚弱な体質であったと述べている。彼の声は大聴衆に届くには力強いとはとても言えるものではなかった；それに彼は、公に姿を見せることにどうにもならない恐れを抱いていた。群衆は (crowds, die Masse als solche 群衆自体が) 彼を怯えさせた。<19>イソクラテースは、この広場恐怖症 (agoraphobia, „Phobia“<sup>(1)</sup>) のことをあけっぴろげに語りながら、(明らかに: offenbar) 単にすべての政治的活動への完全な不参加に対する釈明を申し出ようとしているのではない；それに加え、彼の奇妙な様態 (his strange condition, dieser Anlage この性向) が、自分の人格のそのずっと深いところに根ざす非常に独特な特徴である (a very personal feature of his character, rooted far in its depths, eines originellen Zuges …, der in tieferen Schichten seines Wesens begründet ist 彼の人となりの深層に根柢をもつ独特な特徴) と意識もしていた。ソークラテースの場合のように、彼 [= イソクラテース] が政界に入ることを断るのは (refusal, Zurückhaltung 自制)、関心の欠如の兆候なのではなく、深い知的、精神的な葛藤 (a profound intellectual and spiritual conflict, Problematik 問題性) ——彼の働きを妨げもし、と同時に、彼がその当時の政治的危機の面で (in the contemporary political crisis, des Kairos<sup>(2)</sup>) 果たすべき使命についての自らの理解を広くもした葛藤——の結果であった。プラトーンの描くソークラテースのように、彼 [= イソクラテース] は、自分は大いに必要とされている改革を集会 (the assemblies, der Volksversammlung 大衆集会) や法廷で弁士として活動的な職業に就くことに拠るよりも何か別の方法で始めるべきだ、と確信していた。このように彼は、自分を通常の政治的生活に不向きにさせている個人的な弱点が、自分を高尚な天職へと召喚している、と思った。彼の弱点が彼の運命を決定する力となった。しかし、ソークラテースが、彼の絶えまない質問と吟味 (questioning and examining, Fragen und Prüfen 質問と吟味) によって、道徳 (morality, des Sittlichen) の分野における探検家 (an explorer, Forscher) となり、そうして知の新世界 (a new world of knowledge, eines neuen Wissens) の閉ざされた門の前に立っているのに気づいたのに対し、より実践的な (practical, praktisch veranlagt 実践的な素質のある) イソクラテースは、さしあたりは彼の偉大な同時代者の人格に深く

感銘をうけたようであり、また自分が据えた高遠な基準 (the lofty standard he set, seinem Vorbild 自分の模範) に負けないよう不断に努力したのではあるが、それにもかかわらず、自分の特別な才能と自分の群衆に対する本能的な嫌悪が、自分を小さな集団 (circle, Kreise) 内の新しいタイプの政治活動の教師となるように運命づけている、と思ったのである。<sup>(3)</sup> <20>

彼が生きた時代さえもこの過程 (this course, diesen Weg) を不可避とするように思われた。彼の隠遁場所の静けさと集中のなかで、彼は、誤って導かれている大衆 (masses, Masse) の努力に、また長く閉じられた環のなかで救いようもなく (hopelessly, unfruchtbar 実りをもたらすことなく) ぐるぐる回転し続けてきているギリシア国家の政治に、新しい方向 (direction, Ziele 目標) を与えることができる政治家を養成 (educate, heranbilden) したいと思った。彼は、すべての弟子に彼自身の心を占めている新しい目的 (the new aims, die Ziele) に対する熱狂を呼び起こさせることに着手した。彼のなかには、(つまるるところ: im Grunde) その思考が実際の政治家たち (the practical statesmen, der Realpolitiker) と同じ方向に動き、彼ら [=実際の政治家たち] のように、力 (Power, Macht)、栄光 (Glory, Ruhm)、繁栄 (Prosperity, Prosperität)、発展 (Progress, Expansion 拡張)、といった願望 (aspirations, Wunschvorstellungen 願望的な考え) に導かれるような、一人の政治的な夢想家 (a political visionary, ein politischer Träumer) が住んでいたのである。(ようやく: erst) 徐々に彼の経験は、彼に自分の目的を修正するように仕向けた; しかし正にその最初から彼は、それら [=そうした願望, dieser Wünsche これらの願望] はペリクレスの時代の着古された (outworn, ausgetretenen 履き古された) 方法——ばらばらのギリシア都市国家間の (between the separate Greek city-states, innergriechischen ギリシア内部の) 競争的な駆け引き (competitive diplomacy, Interressenpolitik 利害の駆け引き) や消耗な争い (exhausting wars, der aufreibenden Machtkämpfe 消耗な権力闘争) ——によってはかなえられようがないと考えた。この点で、彼の考えはまったくペロポネネーソス戦争後のアテーナイの衰弱の産物である。彼 [=イソクラテース] という夢想家は、精神におけるこの現実の障害を飛び越した。彼は、アテーナイは、スパルターやその他のギリシア都市国家との、あるいは勝者と敗者との完全な対等さをもつ、平和的な合意 (agreement, Ausgleich 和解) をもたらすことにのみに、ギリシア問題におけるその指導的役割を果たし得る、と考えた; というのは、そのとき、アテーナイの粗野な競争相手に対する知的優越性が、(おのずと: von selbst) 自ら [=アテーナイが] 勢力均衡を手に入れることを確実なものにするだろうから。<sup>(4)</sup> <21> そのようなギリシア諸国家間の対等さの確立と、それら [=ギリシア諸国家] の、一つの (one, einer) 大きな国民共通の (national) 目的 (purpose, Aufgabe 使命) への一意専心、のみが、ギリシアの崩壊を、そうしてそれとともに、小さなばらばらな諸国家 (states) の完全な衰亡を止め得たのである——それら [=小さなばらばらな諸国家] はそれまでは、そのどれも他のすべて [=他のすべての諸国家] に対する、全国民 (the entire nation) に永続する平和を課すようなこの上ない支配力のある、本物の優位性を手に入れることができなかつたにもかかわらず、お互いを消耗させようとするしかなかつた。ギリシアを救うためには、共通の国民の (national, als Nation) 目的が見い出されなければならない。だから、ペロポネネーソス戦争の苦い経験の後、イソクラテースは、真の政治的手腕の本質的な本分がそれを見い出さなければ

ならないと考えた。まさに、差し迫った予備段階 (preliminary) があった：ギリシア国家の政治的生活の深い腐敗とその腐敗の原因——ばらばらの国家と党派の、破壊しつくす相互の憎悪——が除かれなければならなかったのである。トゥーキュディデースの悲惨な描写によれば、ペロポネネーソス戦争の間、あらゆる種類の極悪非道の罪に対する正当化として使われ、またあらゆる確立した道徳律というよりどころ (the foundations of all established moral codes, alle festen sittlichen Begriffe あらゆる確固とした道徳観念) を解体してしまったのは、まさにその、隣人に対するめいめいの利己的な憎悪であった。〈22〉しかしソクラテースは、プラトーンのソークラテース (the Platonic Socrates, der platonische Sokrates) のように、切実に必要とされる改革が、新しい道徳世界、つまり、いわばおのおのの人間の魂の内部の国家 (a state as it were within each man's soul, eines Staates im Innern 心の内の国家)<sup>(5)</sup> の創造によって達成され得る、とは思わなかった。〈23〉彼は (そうではなく：sondern)、ギリシアの観念である国民 (the nation, die Nation)、が、精神的復興における新しい要素が結晶化するはずの問題の中心点であると考えた。プラトーンは弁論術 (rehetoric, Rhetorik) を、追求されるべきどんな理想 (ideal to be pursued, Ziel 目的) をも指摘することはできず、聴衆を説得する仕方を教えられるだけだと、そしてそれ故に、不道徳な目的 (immoral ends, unsittlicher Ziele) を達成するための知的道具 (intellectual instruments, geistige Waffen) を提供する実践的手段でしかない、と、非難していた。〈24〉弁論術の主張におけるそのような弱点は、否定しがたいものであった；そして、ギリシア人の最もすぐれた人たちの道義心 (the conscience, das Gewissen) がますます敏感になっているときに、それ [= 弁論術の主張におけるそのような弱点] はその [= 弁論術の] 技術 (the art, die Rhetorik 弁論術) にとって現実の危険 (a real danger, eine Quelle der Gefahr 危険の種) であった。汎ギリシア主義の (Panhellenic, panhellenischen) 理想の採用において、ソクラテースはこの問題を解く方法をも考えた。本質的なことは、言うならば、従来の弁論術教育を特徴づけていた道徳的無関心 (the moral indifference, der moralischen Indifferenz) と、実際的な見地からするとあらゆる政治 (all politics, aller Politik) からそれてしまうことになる、プラトーン的なあらゆる政治の道徳性 (morality, Ethik) への分解との間の、中間 (a mean, eine mittlere Linie 中間線) を見い出すことであった。〈25〉新しい弁論術は、倫理的に (ethically, ethisch) 説明され得る (interpreted, vertretbare 責任を負える)、しかも同時に実際的な政治行動に移され得る、一つの理想 (an ideal, Zielsetzung 目標設定) を見い出さなければならなかった。この理想が、(彼の見解では：nach seiner Ansicht) ギリシアのための新しい道徳律 (a new moral code for Greece, seine neue nationale Ethik 彼の、新しい国民の道徳) のことであった。それ [= ギリシアのための新しい道徳律] は (同時に：zugleich) 弁論術に尽きることのないテーマを与えた；(それどころか：ja) そこ [= ギリシアのための新しい道徳律] に、すべての高度な雄弁 (eloquence, Rhetorik) の根本的な中心問題が最終的に見い出されたように思われた。古い信念がその拘束力を失いつつあるときに、また都市国家の久しく確立されていた構造 (structure, Staatsform 社会体制) (その構造に、その時までには、個人 (the individual, der Mensch 人) は、自分自身の道徳的基礎が確かに具現化していると感じてきた) が解体しつつあるときに、国民の偉業の新しい夢 (the new dream of national achievement, der Traum nationaler Einheit und Größe 国民的な統一と偉大さ

の夢) は力強い靈感のように見えた。それは人生に新しい意義を与えた。

その危機の (critical) 時代に、それゆえに、イソクラテースは、職業としての弁論術 (rethoric, der Rhetorik) を自ら選択したことにより、われわれが述べてきたような新しい理想 (ideals, Zielsetzung 目標設定) を明確に述べることに駆り立てられた。彼が直接にゴルギアースによってその方 [= 新しい理想] に駆られた、ということは充分あり得るのであって、彼 (ゴルギアース) の *Olympicus* が、イソクラテースのライフワークの中心となる主題を明らかにしたのである。<sup>(6)</sup> そんなことはよくある：(つまり) 一人の偉大な師匠が晩年にある理想を明確に述べ、弟子にそれへの感嘆の気を起させ、そしてそれによって彼の弟子の全生涯を決め指導する。もしイソクラテースが雄弁家 (an orator, Redner) ではないのに政治家 (a politician, Politiker) になりたいと思ったとしたら、また、もし彼が、ソクラテースの哲学や初期の型の弁論術 (rhetoric, der Rhetoren 雄弁家) という競争相手に対抗して (against, neben に並んで)、教育者 (an educator, Erzieher der Jugend 青少年の教育者) であり弁論の (rhetorical, der Rhetorik 弁論術の) 教師であると主張したいと、そうして彼らの批判に敢然と立ち向かいたいと、思ったとしたら、彼は (彼にとって：für ihn) そのようにする唯一可能な方法を、その新しい理想 (ideal, Idee 理念) に集中することに見い出していたのである。<sup>(7)</sup> そのことは、彼が最期までそれ [= その新しい理想] を追求した根気強さを説明する。彼の弱点は (なるほど：zwar) 彼を批判することをまったく容易にする；しかし、イソクラテースほど、より完全に自分に課した職務 (task, Beruf) を果たした人物、また自分の使命 (his mission, der Aufgabe) についての自身独自の (his own, seine besondere 自分の並々ならぬ) 考えといっそうよく一致していた人物、を見い出すのは困難である。その考えは弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) に、それ [= 弁論術] が欠いていると長く非難されていた、実質的な内容 (the realistic content, einen eigenen sachlichen Gehalt 特有の実質的な内容) を与えた。<sup>(8)</sup> <26> それ [= その考え] によって弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) の教師はついに、彼 [= 弁論術の教師] を哲学者と同格に置きかつ黒幕政治家たち (machine politicians, den Tagespolitikern 日々のことだけを考える策略家たち) から独立させる、威厳 (the dignity, die Würde) を勝ち取った——いやそれどころか、それ [= その威厳] は彼に、彼はどんな個々の国家 (separate state, der Einzelstaaten) のものよりもより高い利害関係 (interest, Interesse) を表した (represented, vertrat 代弁した) のだから、彼ら [= 黒幕政治家たち] が持っていたよりもより高い格 (rank, Rang) を与えた。イソクラテース自身の素質 (nature, Natur) における欠陥は——彼の身体的弱点だけではなく、彼の知性と性格における欠点も——それに弁論術 (rhetoric, der Rhetorik) 自体の弱点さえも、彼の趣意書 (programme, Programm) によって、ほとんど長所 (virtues, Tugenden) に変えられた；ないし、そんなふうだった。雄弁家 (the rhetor, der Rhetor)、つまり政治的なパンフレット著作者 (pamphleteer, Pamphletist)<sup>(9)</sup> ないしイデオロギー唱導者 (ideologist, Ideologe 《特定の》イデオロギーの唱導者) が、あれほどの好意的な立場にいることも、全国家に及ぶあれほどの広範な影響力を誇ることも、それ以来二度となかったのである；またイソクラテースは、たとえその [= イソクラテースの] 影響力が、創造的精神の豊かさや活力において<sup>(10)</sup> 何か欠いているとしても、決然と刻苦勉励する並外れて長い生涯によって<sup>(11)</sup> 部分的にそれらを埋め合わせしたのである。<sup>(12)</sup> もちろん彼の決意 (his determination)

が彼の仕事の質に影響することはない；しかしそれでもそれ [=彼の決意] は、彼の使命 (mission, einer Tätigkeit 仕事) の、それは教師のそれ [=使命] のように彼の生きている人間 (living men, den lebenden Menschen) との関係に由来するのであるが、その成功におけるきわめて重要な要素であった。

<注記と考察>

- (1) Pobie は「恐怖症」、Agoraphobie は「広場恐怖症」。なお、ἀγορά は「広場」、φοβερός は「恐怖を起こさせる、心配な」「怖がりの、恐怖に駆られた、パニック状態の」などの意味をもつ。
- (2) ドイツ語版で Kairos とされているのは、ギリシア語の καιρός (「決定的な時」「役に立つこと、適切」) のことであろう (οἱ καιροὶ 「決定的危機」)。
- (3) イェーガーは、(プラトーンの描く) ソクラテースとイソクラテースとの、それぞれの資質や、アテーナイの危機への向かい方、開拓した思想的意味、などの違いを鮮やかに対比している。
- (4) 訳文の「自ら [=アテーナイが] 勢力均衡を手に入れることを確実なものにするだろうから (assure that she acquired the balance of power)」は、ドイツ語版では「(アテーナイに) 決定的役割がきつと与えられるだろう (die entscheidende Rolle zufallen muß)」という表現になっている。
- (5) a state as it were within each man's soul を「いわばおのおのの人間の魂の内部の国家」と訳しておいたが、その意味は、《原文注記》23. における<注記と考察> (31) で引いた藤沢訳『国家』の「自己の内なる国制」に相当する。
- (6) ゴルギアースは、「前408年にはオリュンピアで大群衆を前に演説し、アカイメネース朝ペルシア帝国に対決するべくギリシア人は和解・団結すべきだ、と訴えたといい、またその財宝をもって自らの黄金像をデルポイの神殿に奉納した最初の人となったと伝えられる。」という。(松原著) なおゴルギアースについては、本継続研究 (6) II. 3 (→9) の<注記と考察> (2) を参照のこと。
- (7) ここの一文は、イソクラテースの思想形成に関しての、イェーガーの仮説的推量が述べられている。
- (8) the realistic content (einen eigenen sachlichen Gehalt) を「実質的な内容」と訳しておいた。原文注記26. の<注記と考察> (33) を参照のこと。
- (9) Pamphletist には「パンフレット《特に政治的誹謗文書》の筆者」という意味がある。
- (10) in richness, power, and genius を、ドイツ語版の an Reichtum und SpannKraft des Genius を参考にして、「創造的精神の豊かさや活力において」と訳しておいた。
- (11) イソクラテースの生没年は、前436年～前338年。98歳という長寿であったことになる。なおイソクラテースに関しては本継続研究 (9) II. 13. <注記と考察> (15) を参照のこと。
- (12) ここの一文は、その手前の一文を言い直し補強しているのであろう。

4. イソクラテースがその教育趣意書で表明する、弁論術における内容と形式の不可分性  
<訳文>54p～55p

過去何世紀もの間、歴史家たちはイソクラテースにモラリスト (a moralist, dem Moralisten) 以上のものは何も見てこなかったのであり、あるいは彼をもっぱら著述家にして政治評論家 (a writer and publicist, den Schriftsteller und Publizisten) としてのみ思い描き、教師 (a teacher, dem Lehrer) としてはほとんど思い描いてこなかった。彼らは [= 歴史家たち] は、彼のすべての公刊された書物が彼の学派の教育計画 (the educational program, des Erziehungsprogramms) に付随したものであると、プラトーンやアリストテレスのそれのように、十分に理解しなかった。しかし彼の経歴 (career) についての最新の (modern, moderne) 見解は、今や、彼の諸著作の政治的内容 (the political content, den politischen Gehalt) を正当に評価し、(紀元前) 4世紀の歴史におけるそれら [= 彼の諸著作] がもつすべての意義を理解している。それら [= 彼の諸著作] はもちろん、彼自身の弟子たちの仲間の外にも影響を及ぼすように意図されていたし、それら [= 彼の諸著作] によって彼はしばしば、彼が教えるのがまったく聞けなかった (seinen Unterricht niemals genossen hatten 彼の授業をまったく楽しめなかった) 人々に影響を及ぼした。しかし同時に彼の政治的な演説 (speeches, „Reden“ 演説) は、彼が自分の学校で教えた新しい型の雄弁術 (eloquence, der Beredsamkeit) のひな型であった。後に彼は自ら、広い公衆に、『アンティドシス (財産交換)』で、彼のもっともすぐれた演説から取られた断片の選集において、彼の教授 (teaching, Unterrichts) の特別な性質 (character, die Art) を例示した (exemplified, erläutert に説明を加えた)。これらの演説は、内容だけでなくまた形式のひな型 (models, Modelle) となることが意図されていたのであり、<sup><27></sup> というのは彼の教え (teaching, Lehre) では二つの要素は不可分だったのである。われわれが、諸演説——われわれの唯一の根拠となるもの (evidence, Quelle 情報源・資料) ——から、彼が考える教養 (the culture, Bildung) の真の性質 (the real character, das Wesen 本質) を再生しようと試みるときはいつも、われわれは絶えずあの二重の目的を思い起こす必要がある。われわれにとって幸いなことに、彼はたびたび、自分の技術 (his art, seine Kunst) と自分の教育思想 (his educational ideals, seine Ziele als Erzieher 彼の教育者としての目的) についての自分の考えを述べた；彼はしばしば、彼の議論の脈絡 (the thread of his argument, Reflexionen 熟考) を断ち、彼が言おうとしていることを、またどのようにして、何故、そう言おうとしているのかを説明する、機会を逃さずにつかんだ。ほんとうに彼は、自分の仕事の初めに、彼の時代の他の教育 (educational, Bildung) 権威者たちとの関係で自分の位置を明瞭に限定する、いくつもの趣意書の著作 (programme-works, programmatische Schriften) を刊行した。われわれは、もしわれわれが彼の活動の全範囲と彼のパイデア (paideia, die Paideia) の真の性質 (the true character, richtig 正しく) を理解しようとするならば、それら (diesen Äußerungen これらの発言) から出発しなければならない。

##### 5. イソクラテースの弁論学校の設立趣意書と判断される『ソフィストたちを駁す』に、プラトーン (の学派) との論争の最初の足跡を見ることができる

<訳文> 55p~56p

彼は‘演説原稿代作者 (speech-writer, Redenschreibers)’だったのであるが、それは多くの点で今日の法廷弁護士 (a barrister, Rechtsanwalts 弁護士) という職業に相当してい

た；しかしわれわれは、彼がその仕事を止めて弁論術の教師 (a teacher of rhetoric, eines Lehrers der Rhetorik) をすることにした時期、あるいは彼をそうさせた理由、については何も知らない。リュウシアース<sup>(1)</sup>、イーサイオス<sup>(2)</sup>、そしてデーモステネース<sup>(3)</sup>のように、彼は金儲けのためにそれに (dem Logographenberuf 弁論作家業に<sup>(4)</sup>) 従事したのであった——というのは、彼の父の財産は戦争によってほとんど破綻していたからである。〈28〉後になって彼は<sup>(5)</sup>、(アリストテレスが滑稽に指摘しているように) 彼が (かつて: ehemals) 執筆した法廷演説 (the legal speeches, Gerichtsreden) の著作が何巻も何巻も (volumes and volumes, ganze Bände 全巻が) 書店 (the bookshops, den Buchhändlern 書籍販売業者) にあったにもかかわらず、彼の経歴のあの時代を述べることを嫌がっていた。〈29〉それらのうち (of them, dieser Gattung このジャンルの)、ほんの少しだけが現存している: (その理由であるが: da) 彼の死後に彼の著作を編集する責任がある彼の弟子たち (pupils, die Schule 学派) は、師自身と同様に、それらを保存することに関心をもたなかった。〈30〉われわれはそれらを (前) 390年ぐらいまで追うことができる。〈31〉それゆえに、イソクラテース学校の創設は (時代的には: zeitlich) プラトーンのそれとおおよそ一致する。〈32〉彼の入門的演説 (introductory speech, Programmrede 綱領的演説) である『ソフィストたちを駁す』において、彼がプラトーンの『設立趣意書 prospectuses』(Werbeschriften 宣伝用パンフレット) である『ゴルギアース』と『プロータゴラス』を自分の前にもっていて、それらとの対比において自分自身のパイデアーの理想 (ideal of paideia, Ideal der Paideia) を掲げようと慎重に試みていることは明らかである。〈32a〉そのことはわれわれを同じ時代に連れ戻す。われわれにとってのあの演説 [= 『ソフィストたちを駁す』] の比類のない価値は、それ [= あの演説] が二つの偉大な教育学派 (the two great schools of education, beiden Schulen 二つの学派) の間の、一世代の間ずっと続く教養に関する (cultural, um die Bildung) 戦闘の、その最初の戦いを矢つぎばやに<sup>(7)</sup>再現する、その生々しさ (the vividness, der Lebendigkeit) にある。そうしてわれわれにとって、プラトーンが、その姿を初めて見せた時に、多くの同時代者たちに与えたアクチュアルな印象の足跡をそこ [= (あの演説に見る) その最初の戦い] に辿ることは、同じ程度に興味深いことである。われわれは、彼の重要性を彼の哲学が人間の歴史の20世紀以上に亘って与えている影響によって評価する、ことに慣れているので、われわれは、彼が彼自身の時代の人間にも同様に強力な影響を及ぼしたと自然に想像してしまう。そういう観方に対しては、イソクラテースは一つの有益な矯正手段 (corrective, Korrektiv 矯正策) となる。

#### <注記と考察>

(1) リュウシアース: 前459/445年頃～前380/378年頃。アッティケー10大雄弁家の1人で、「法廷弁論代作者 logographos として生計を立てた。他人の弁論の草稿のほか、兄ポレマルコス Polemarkhos を獄中で毒殺処刑した三十人僭主の1人エラトステネース Eratosthenes に対する弾劾演説 (前403) や、告訴された哲学者ソクラテースを擁護する弁明文、前388年オリュンピアーにおいて自己の政見を発表したオリュンピアコス Olympiakos などが名高い。」という。(松原著) なおリュウシアースについては本継続研究 (7) のII. 1. <注記と考察> (9) を参照のこと。



- (2) イーサイオス：前420年頃～前340年頃。アッティケー十大弁論家の一人で、「イソクラテースとリュシアーヌスに弁論術を学び、法廷演説代作者としてアテーナイで活躍した。」とされ、「師リュシアーヌスよりもなおいっそう装飾を棄てた率直・鋭利な文体の完成者で、驚嘆すべき説得者として畏怖されたという。彼はデーモステネースの師として知られ、20歳になった弟子が自らの後見人を相手どって訴訟を起こした時にも力を貸している。」という。(松原著)
- (3) デーモステネース：前384年～前322年。アテーナイの雄弁家で政治家で、「古代ギリシア最大の弁論家、アッティケー（アッティカ）十大雄弁家の最高峰といわれる。」という。なおデーモステネースはイエーガーのイソクラテースに関する叙述を理解する上で重要な意味をもつので、松原著より以下に抜粋して引いておく。

「…職業的弁論家として身を立て、法廷訴訟演説の代作や雄弁術の教授をするかわら、自らにさまざまな訓練を課して自己の弱点を矯正——俳優に演技を学んで地下室で練習したり、口中に小石を含んで発音を明瞭にするよう努めたり、駆け足で坂を登りながら詩句を一気に述べ立てて息遣いを整えたり、海の怒濤に向かいながら演説の稽古をして声量を豊かにしたり、またトゥーキューディデースの史書を8度も筆写して文体を改善するなど切磋琢磨——した。

「その弁論にはランプの灯芯の匂いがする」とからかわれるほど研鑽を重ね、しだいに名声を得た彼は、前355年頃から公的問題を扱うようになり、政界に乗り出していく（『アンドロティオン弾劾演説』（前355）、『レプティネース弾劾演説』（前354）など）。対外的には、終始反マケドニアの立場を堅持、当たるべからざる勢いで南下しつつあったこの北の強国に対して、アテーナイを盟主とする諸都市の団結を訴え続けた（『メガロポリス市民のために』他）。マケドニア王ピリッポス2世に対する一連の弾劾演説（前351、前343、前341等）および、3つの『オリュントス演説』（前349～前348）、『ケルソネーソス論』（前341）を通じてアテーナイ市民を奮起させ、親マケドニア派のアイスキネースと十数年にわたる論戦を展開。弁論の力でアテーナイの旧敵テーバイを味方に引き入れて同盟軍を組織させることに成功したが、前338年カイローネアの合戦でピリッポスに敗れ、彼自身は武器を棄てて逃げ去るという醜態を演じた。…

…大王（アレクサンドロス大王；引用者注）の死（前323）により帰国し、反マケドニア運動を再開したものの、翌年克蘭ノーヌ Krannon（テッサリアーの町）の戦いでギリシア連合軍がアンティパトロスに敗れるに及んで、死刑を宣告され、ヒュペレイデースらとともにアイギーナへ逃れる。…

デーモステネースの名の下に61篇の作品が伝存するが、かなりの偽作が混入しているものと推定される。アッティケー散文の範を示す精巧な彼の文章は、キケロその他後代の人々に大きな影響を与えた。…」

- (4) λογο-γραφος は「弁論作家」という意味をもつ。
- (5) ドイツ語版ではこの箇所に、「als er sich als der Phidias der Redekunst fühlte 彼は自分を雄弁術のペイディアースだと思っていたとき」の一文が入っている。ペイディアース（ピーディアース）は、「前465年頃～前425年頃に活躍」し、「ギリシア前期クラシック美術の巨匠であると同時に、古代全般を通じて最大の彫刻家と評されている」とい

う。(松原著)

- (6)『イソクラテス 弁論集1』(1998年)の訳者は、その解説で、「…この頃、前393年から前390年にかけて、イソクラテスの生涯に転機が訪れている。彼は40代の壮年期にあったが、やくざな法廷弁論代作稼業から足を洗い、アテナイに弁論学校を創設する。…」と説明している。なおプラトーンのアカデーメイアの創設は、松原著では、「前387年頃」としている。
- (7)「矢つぎばやに」は、blow upon blow (Schlag auf Schlag) の訳である。

#### ≪原文注記≫

1. この対抗の歴史の充実した説明が、H. von Arnim' s *Leben und Werke des Dion von Prusa* (Berlin1898) pp.4-114.にある。
2. たとえば、Drerup の門下生の著書、*Die Pädagogik des Isokrates als Glundlegung des humanistischen Bildungsideals* (Würzburg 1923)、そしてとくに、*Das Nachleben der Pädagogik des Isokrates* (p.199f.) と *Isokrates und der Humanismus* (p211ff.) と称する二つの節、を参照のこと。より最近ではDrerup自身が、*Der Humanismus in seiner Geschichte, seinen Kulturwerten und seiner Vorbereitung im Unterrichtswesen der Griechen* (Paderborn 1934) と題する四つの講演を行なっている。Burnet や Ernest Barker のような英国の学者たちは、しばしばイソクラテースを the father of humanism (人文主義の父) と呼んでいる。<sup>(1)</sup>
3. 何人かの批評家は、パイデアーの歴史家はまずそれについての彼自身の定義を与えることによって始めなければならないと主張してきた。そのことは、むしろ彼らは、哲学の歴史家に、プラトーンないしエピクローロス<sup>(2)</sup>の哲学の定義から始めるか、あるいはカントないしヒュームの哲学の定義から始めるかを要求しているかのようである——四人とも非常に異なっているのであるが、パイデアーの歴史ははできる限り正確に、ギリシア的パイデアーのあらゆる異なる意味、つまり、それがとった多様な形式とそこに現れた多様な精神的位相、を叙述すべきであり、またそれらの個々の特性とそれらの歴史的関連を説明すべきである。
4. このことについては、私の小論、*Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung* (『ギリシア的教養の構築におけるプラトーン的位置』: Berlin 1928)、*Die Antike*, vol.4 (1928), nos.1-2, 初出、を参照のこと。
5. この見地から考えるに、哲学は、とくにギリシア哲学は、現代的ヒューマニズム (humanism, Humanismus) の発展において決定的な役割を果たしてきたのであるが、それ (= 現代的ヒューマニズム) は、それ (= ギリシア哲学) なくしては起動力をもたなかったであろうし、それ自身の目的を説明することもできなかったであろう。実際、古典期の文明 (classical civilization, der atiken Kultur 古代文化) の哲学的側面の研究は、現代哲学だけではなく、現代文献学においてさえ、いよいよ重要になってきており、また古典学の目的 (the purposes, Zielsetzung 目的設定) と方法に深く影響を与えてきた。しかしまた、同じ見地から見ると、ヒューマニズムそれ自体の歴史は新しい様相を呈する。歴史家たちは通常、二つの鋭く対立する時代——中世とルネッサンス、スコラ哲学と人文主義 (humanism, Humanismus) ——のことを話す。しかしこの単純な図式は、

われわれが、中世における (in the Middle Ages, im Hochmittelalter 中世の最盛期における) ギリシア哲学の復興が、ギリシア的パイダイアーの絶えることのない影響 (in the uninterrupted influence, in der Geschichte der Nachwirkung 影響の歴史) のなかで、実にもう一つの偉大な画期的出来事 (epoch, Epochen) であったということを了解するや否や、過度な単純化であることが明らかになる。その (=ギリシア的パイダイアーの) 影響はまったく静まっていくことはなかったのであり、中世と現代の歴史を通していつも生き続けた。Non datur saltus in historia humanitatis.<sup>(3)</sup>

6. ギリシア文明の有機的構造のなかで哲学によって演じられた役割を評価することは、その [= (ギリシア) 哲学の]、ギリシアの内、外の歴史との緊密な関係に十二分に敏感でなければ、不可能である。
7. 原文注記1. を参照のこと。
8. プラトーンは、早くも〔前〕四世紀の初めの10年間に『プロータゴラス』と『ゴルギアース』を執筆した。イソクラテースは自分の学校を390年より前には設立できなかったのであり、というのは彼の現存する演説において、われわれは彼の仕事を、少なくともその頃まで法廷弁論の代筆者としてたどることができる；ことによると、それは80年代にまで続いていたかもしれない。
9. イソクラテースの人生で起こったと思われること (the facts of Isocrates' life, die biographische Überlieferung 伝記的伝承) は Blass によって *Die attische Beredsamkeit* (2 nd ed., Leipzig1892) の第2節で詳細に考察されている；彼の先生たちについての伝承 (the traditions, die Nachrichten 情報) に関してはその著の11ページを参照のこと。墓碑については、「偽プルータルコス『十大弁論家列伝』」(pseudo-Plutarch, vit. X orat.) 838d<sup>(4)</sup>を参照のこと；これらの伝記の著者は、その考古学的、古書研究的な資料をギリシア人の碑文研究家 (epigraphist, Perihegeten) ディオドーロス<sup>(5)</sup>の著作から取った。
10. イソクラテースのテッサリアー滞在の明確な年代を定めることは不可能であるが、しかしそれは、〔前〕410年の直前か直後であったに違いない。
11. プラトーンの『メノン』70b<sup>(6)</sup>；そしてイソクラテースの『アンティドシス (財産交換)』155. <sup>(7)</sup>を参照のこと。
12. 彼 [=イソクラテース] はそれを、ή τῶν λόγων μελέτη (鍛錬), <sup>(8)</sup>あるいは παιδεία (鍛錬), <sup>(9)</sup>あるいは ἐπιμέλεια (励むこと)<sup>(10)</sup>と呼んでいる。Blass は、原文注記9. で引いた著作の p.109で、彼 [=イソクラテース] がそれを τέχνη (技術)<sup>(11)</sup>と呼ぶことを避けているということ、を暗示している：おそらく technai ないし弁論術の入門書執筆者 (the writers of technai, or rhetorical handbooks, den Technographen 技術記述者) と混同されることを避けるためであろう。しかし『ソフィストたちを駁す』9-10<sup>(12)</sup>や『アンティドシス (財産交換)』178<sup>(13)</sup>のくだりは、彼が自分の φιλοσοφία (フィロソフィア—：愛知・哲学、ドイツ語版：σοφία 知恵・知識<sup>(14)</sup>) を一種の τέχνη と考えていたことを証明するのに十分である。
13. この点をすべての関連する文章を列挙することによって証明することは不要である。『アンティドシス (財産交換)』270<sup>(15)</sup>において彼は、自分自身の仕事に対してのみ φιλοσοφία (フィロソフィア—、哲学) の肩書を要求しているのであり、また他の教師

たち (たとえば弁証家、数学者、そして修辭的な ‘technographers 弁論術著述家’) はそれ [=φιλοσοφίαの肩書] を使う権利はない、と述べている。彼は初期の著作ではあまり排他的ではなく、そこでは彼は自由に、専門的論争者ないし論争術家 (the professional disputers or eristics, der Eristiker) (『ヘレネ頌』 6)<sup>(16)</sup> やポリュクラテース (『プシリス』 1)<sup>(17)</sup> のような修辭学の教師、のことを自由に φιλοσοφία と語っている；そして『ソフィストたちを駁す』 1<sup>(18)</sup> では、彼はそれを、その著で描写されている、高等教育・教養 (higher education and culture, der höheren Bildung und Erziehung) の全部門の一般的な記述 (a general description, Generalnenner 公分母) として使っている。

14. トゥーキュディデース『戦史』 2. 40. 1.<sup>(19)</sup>
15. イソクラテース『民族祭典演説』 47. χαταδείξαι という語は教祖 (等々 : u.dgl.) の行為を述べている。この箇所での φιλοσοφία という語は、‘philosophy 哲学’ を意味してはいない。<sup>(20)</sup>
16. Blass (原文注記 9 で引いた著書の 28 p) は、イソクラテースの時代には ‘philosophy’ という語はまだ ‘culture’ (Bildung) を意味していたのであり、したがって彼の ‘teach philosophy’ という主張には不合理なことはなにもない；しかしながら彼は、true philosophy (真の哲学) の——つまりイソクラテースが true culture (真の教養) の唯一の代表者であるとふるまうのは傲慢である、と言う。そうは言っても、プラトーンや、他の学派や教師たちのすべてが、同様の主張をしていた：プラトーン『書簡集』 7.326a,<sup>(21)</sup> 『国家』 490a,<sup>(22)</sup> などを参照のこと。
17. プラトーン『プロータゴラス』 313cf.<sup>(23)</sup>
18. プラトーンの『パイドロス』のなかの、ソクラテースがイソクラテースに対し偉大な未来を予言させられている、あの文章に、どれくらい歴史的な真実性があるのかを言うのはむづかしい。おそらく二人は (the two, der junge Isokrates den älteren Mann 若いイソクラテースは年配の男に) いつか会ったことがあるということであり、そこ [=あの文章] にはそれ以上のことはない。そのこと [=二人はいつか会ったことがあるということ] は、イソクラテースがソクラテースの友人であったとか、ましてや彼の弟子であったとか、ということにはほとんどならない。それにもかかわらず彼 [=イソクラテース] の著作は、ソクラテースの思想 (ideas, Gedanken) の影響の多くの痕跡を示している。そうしたことの入念な考察は、H.Gomperz’ *Isokrates und die Sokratik* (*Wiener Studien* 27,1905,p.163,and 28,1906p.1) を参照のこと。彼は、的確にも、イソクラテースがそれらの思想の知識 (his knowledge of these ideas, seine Kenntnis) をソクラテースに関する諸著作 (books about Socrates, der Literatur der Sokratiker ソクラテース信奉者たちの文学) から得たと見ている；そうしてこのことは、彼がそれらのこと [=ソクラテースの思想の影響の多くの痕跡] を、自ら教育理論の領域に入る 390年から380年の間になって初めて話し始めている、という事実によって支えられている。そうは言っても私は、Gomperz はアンティステネースのイソクラテースへの影響を誇張している、と考えている。<sup>(24)</sup>
19. イソクラテースの人生の諸事実については、Blass (原文注記 9 で引いたもの) の p.8f. ; R. Jebb, *Attic Orators* (London1876) II, p.1f. ; それに Münscher の、Pauly-Wissowa’s

- Realenzyklopädie der klass. Altertumswiss.* 9.2150f.にある詳細な論文、を参照のこと。彼の弱い声と彼の臆病さについては、〔イソクラテースの〕『ピリッポスに与う』81,<sup>(25)</sup> 『パンアテナイア祭演説』10.<sup>(26)</sup>を参照。
20. 〔イソクラテースの〕『ピリッポスに与う』81-82<sup>(27)</sup>において、彼は自分の身体的な、また心因性の弱点を認めているが、しかしそれにもかかわらず、思慮 (phronesis, Phronesis) と教養 (paideia, Paideia) において他者よりはるかにまさっていることを要求している。
21. それが、彼が『民族祭典演説』でアテーナイに与える役割である。第二次アテーナイ海上同盟<sup>(28)</sup>の崩壊後においてさえ、彼はアテーナイの精神的指導力を主張し続けた——たとえば『アンティドシス (財産交換)』<sup>(29)</sup>や『パンアテナイア祭演説』において。しかし彼は後に (『平和演説』や『ピリッポスに与う』におけるように)、アテーナイがギリシアの政治的指導権を同様に行使すべきだという主張を放棄した。
22. トゥーキュディデース『戦史』3.82.<sup>(30)</sup>
23. プラトーン『国家』591e; 『パイデア』II, 353f.を参照のこと。<sup>(31)</sup>
24. 『パイデア』II, 131f.を参照のこと。<sup>(32)</sup>
25. 『ソフィストたちを駁す』の演説において、イソクラテースは同時代のパイデアーのこれら二つの極端な類型の対比をしている。
26. プラトーン『ゴルギアース』449d,451a,453b-e,455d.を参照のこと。後に彼は『パイドロス』で (同様の: gleichen) 非難を繰り返している。<sup>(33)</sup>
27. イソクラテースの‘演説’は、けっしてそれとしてなされたのではない。それら [= 演説] の形式は、純粋な作り事である。<sup>(34)</sup>
28. 弁論作家としての彼の仕事については、Dion.Hal.de Isocr.18、そしてキケローの *Brutus* (『ブルトゥス』) 28 (その資料はアリストテレスの συναγωγή τεχνῶν である) を参照のこと。彼は『アンティドシス (財産交換)』161で、自分の父の財産の破滅のことに言及している。<sup>(35)</sup>
29. Dion.Hal.de Isocr.18を参照のこと。
30. Dion.Hal.de Isocr.18によれば、イソクラテースの継息子アフアレウスは、Megacleides に反駁する演説において、彼の継父は‘決して’ (never) 法廷演説 (forensic speeches, Gerichtsreden) を書かなかつたと述べた; しかしそれは、彼が学派の指導者になって以来‘決して’を意味しえるだけである。彼の弟子 Cephisodorus は、彼によるいくつかのそのような演説が現存していると認め、しかし、本物はほんのわずかだと言った。
31. 『銀行家』と『アイギナ弁論』はおおよそ390年と推定され得る。
32. 偽プルータルコス『十大弁論家列伝』(837b)の中での言明、つまり、イソクラテースがキオスではじめて学校 (a school, Eine Schule) をもつた (σχολῆς δὲ ἡγεῖτο, ὡς τινὲς φασιν, πρῶτον ἐπὶ Χίου)、には何の根拠もない。それに ἐπὶ Χίου は、ἐν Χίῳ の言い方として奇妙である。ἐπὶ に続いてわれわれが期待するのは、イソクラテースが教え始めた時代の支配者の (of the archon, des Archonten) 名前である; しかしもし Χίου がその名前のなまった語形であれば、校訂はむづかしい。(紀元前4世紀の) 90年代ないし80年代初めに Χίου のような名前をもつ支配者は一人もいないのである。もしそれが < Μυστι > χίδου であると仮定すれば、そのことはわれわれを (前) 386-385年に連れ

ていくことになり、それはイソクラテースの学校の創設にしてはかなり遅い年代である。<sup>(36)</sup>

32a. イソクラテース自身は、『アンティドシス (財産交換)』193において、演説『ソフィストたちを駁す』は彼の教師の職業 (teaching career, Lehrtätigkeit 教師の仕事) の始まりに属すと言っている。<sup>(37)</sup> Münscher の Pouly-Wissowa 9.2171. における論文には、彼 [= イソクラテース] のプラトーンとの関係を論じている多くの著作リストがある。残念ながら、それらの大部分が (一挙に: mit einem Schlage) 時代遅れとなっているのであり、というのは、それらが基づいている仮定——プラトーンの弁論術 (rhetoric, Rhetorik) に関する代表的な対話篇、つまり『パイドロス』、は彼の若いときないし中年のときに書かれたものである——が間違っているのである。Münscher の論文は、もしそうでなければこの主題の見事な手引書となっているのだが、やはり同じ仮定に基づいて仕事を進めている。今日の学者たちは、この点についての自分たちの見解を変更してきている。(最近の『パイドロス』の時期設定については、p.330,n.5f. を参照)<sup>(38)</sup> 他方私は、Wilamowitz (*Platon* II,108) の説に奉じて、<sup>(39)</sup> そうして『ソフィストたちを駁す』がプラトーンを他のソクラテース信奉者たちと同じように激しく攻撃しているという結論を回避すること、は不可能であると考え。それ [= 『ソフィストたちを駁す』] はプラトーンの『プロタゴラス』『ゴルギアス』の知識、そしておそらく『メノーン』の知識も (私の pp.56~66のその問題についての論議を参照<sup>(40)</sup>)、前提にしているのである。Münscher の考え、<sup>(41)</sup> つまり、イソクラテースが演説 [= 『ソフィストたちを駁す』] を書いたとき彼はまだあらゆる本質的な点で ‘自分はプラトーンと一致していると感じていた’ という考えは、演説 [= 『ソフィストたちを駁す』] におけるどのようなことによっても裏付けられ得ないのであり、むしろ実際には、そのあらゆる行によって否定される。その (見当はずれの: falsche) 考えの唯一の根拠は、『パイドロス』の早すぎる年代設定であって、そこ [= 『パイドロス』] では、プラトーンは明らかに、リュウシアースのような (タイプの: vom Schlage) 弁論家よりもイソクラテースにより友好的である。それ [= 『パイドロス』] が『ソフィストたちを駁す』の前かすぐ後に書かれたという仮説は、われわれに、その演説がプラトーンに対する友情の表明であるというこじつけの解釈を無理にさせることになるだろう。<sup>(42)</sup>

#### <注記と考察>

- (1) この原文注記の最後の一文は英訳版で加筆されたものである。
- (2) エピクローロス: 前341年1月末~前270年初頭。ギリシア人の哲学者。エピクローロス学派の祖で、アテーナイで「庭園 kepos, Κήπος を買って独自の学校を創設、終生ここで弟子たちを教えながら暮らした。その学園は「エピクローロスの園 Kepoi Epikuru」と呼ばれ、売春婦を含む女性や奴隷にも門戸が開かれており、大勢の弟子たちが参集、エピクローロスを中心に友愛あふれる共同生活が営まれた。」という。学園そのものは、その後約600年間存続したという。エピクローロスの基本的な考え方について、「彼は人生における最高善を「快樂 hedone, ἡδονή」と見なしたが、それは肉欲の快感を意味するのではなく、身体の無苦痛と煩惱から解放された平靜不動の精神状態=魂の平安 (アタラクシア—) ataraksia, ἀταραξία を保つことであると主張。外的環境から全く独立

した心の自由を得るべく、公生活の雑踏を避け「隠れて生きよ」と勧めた。」という。また、「幸福の追求を人生の目的と見なし、それに資する限りにおいて肉体の快樂をも認めたが、自らは「ただ水と一片のパンがあれば十分だ」と言うほど簡素な生活を送り、あらゆる人々に対する博愛のゆえに、門弟からは神のように崇敬された。弟子を養成するかたわら、主著『自然について Peri Phyuseos, Περὶ Φυσεώς』37巻をはじめ300巻にのぼるおびただしい書物を執筆したが、そのほとんどは散逸し、数通の書簡と格言集などわずかな断片が伝わるに過ぎない。」という。(松原著)

- (3) イェーガーは、ギリシア哲学のその後の歴史に与えた影響は深いものであると指摘しながら、ギリシア的パイデアーの思想が絶えることなく生き続けたということで、その影響は「中世」においても没することはなかった、と主張している。
- (4) ブルータルコスの『モラーリア』所収の「偽ブルータルコス『十大弁論家列伝』」については、伊藤照夫訳『ブルータルコス モラリア10』(京都大学学術出版会、2013年)の訳者の「解説」で次のように説明されている。

「…あるいは、同じ前2-1世紀にギリシアの弁論家で文体理論家のカラクテのカエキリエスが10人の弁論家の文体を論じた作品、わずかな断片しか伝わらないが、これが後にカノンとして通用するようになったとも言われる。このカエキリエスの著作から大量に抜粋されて、ある逸名の人物により十大弁論家の伝記が書かれたようである。そして、いかなる理由からか、この伝記が写本のままブルタルコスの著作集に紛れ込んだらしい。そのために、偽ブルータルコス『十大弁論家列伝』として、アッティカ弁論家10人の伝記資料であり、古典古代の時代からヘレニズム期に至るギリシアの政治資料でもある貴重な文献が残存したわけである。」

- (5) ディオドーロス (シケリアーの)：前90年頃～前27年頃。カエサルおよびアウグストゥス時代のギリシア系歴史家で、「エジプト、ローマなど各地を旅行し、全40巻から成る大著『世界史 (歴史図書館) (ビブリオテーケー) Bibliothēke, Βιβλιοθήκη, (ラ) Bibliotheca Historical』を30年を費やして執筆 (前60～前30頃)。世界の始まりからカエサルのガッリア遠征 (前54) に至るまでの諸事件を、主にアポロドーロスの『年代記』に依拠しつつ編纂した。」という。その著作は「…大衆向けに平明かつ面白く書かれた歴史書として、また散逸した古代の史書を忠実に採録・保存した点で価値がある。内容は第1巻がエジプト、第2巻はメソポタミアからインドに及び、その後ギリシア・ヨーロッパを経て、第7巻以降はトロイア戦争よりアレクサンドロス大王、そして作者の同時代のカエサルまでを扱っている。第1～5巻と第11～20巻が完全に伝わり、その他は抜粋と断片のみが残存する。数々の神話物語の異伝や、当時知られていた世界各地の習俗、歴史、産物、地誌が詳細に満載されていて興味深い。」ということである。(松原著)

なお、碑文研究家 (epigraphist) はドイツ語版では Perihegeten となっているが、Periegeten ((特に古代ギリシアの)名所案内書の編集者) の誤記であろうか。

- (6) メノーン：?～前400年。テッサリアーの傭兵隊長。美青年であったということで、「…ペルシアの将軍で美男に目のないアリアイオス Ariaios から愛されるが、クーナクサの戦い (前401) で敗れてアルタクセルクセース2世に捕らわれ、1年間拷責を加えられた末に息絶えたという。プラトーンの対話篇『メノーン』の登場人物として知

られる。」ということである。(松原著)

『メノーン』70bは下記のとおりである(藤沢令夫訳、岩波文庫、1994年)。

「ソクラテス おや、メノン、これまでテッタリア人といえば、馬に乗るのがうまいのと金持だということでギリシア人のあいだに名がきこえ、讃歎されていたものなのに、いまではどうやら、知恵にかけてもそういうことになっただけだね。とくに、君の仲間のアリスティッポスもいるラリサの市民というのが、どうもそうのようだ。そして君たちをそういうふうにしたのは、ゴルギアスだね。なにしろ、彼があつた都市にやっけて行くや、君を愛するアリスティッポスが属しているアレウアス家の主だった人々をはじめ、その他一般のテッタリアの主要人物たちは、すっかりその知恵に魅せられて、恋びとのように彼を慕うようになってしまったのだから。とりわけ、あつた人が君たちに植えつけたのは、何かたずねられたときに、いかにも識者らしく、おめず臆せず堂々と答えるという習慣だ。ほかでもない、そもそも彼自身が、ギリシア人のうちで誰でものぞむ者に、何でも好きなことをたずねさせて、しかもどんな人に対しても答に窮しないという人だからね。」

なお、『メノーン』の該当箇所直前、つまり対話篇の冒頭は、メノーンの次のような問いかけから始まる。

「メノン こういう問題に、あなたは答えられますか、ソクラテス。——人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んでも得られるものではなくて、人間に徳がそなわっているのは、生まれつきの素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか……。」

この『メノーン』の想起説に関しては、拙論「想起に関する研究——社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて——(『都留文科大学大学院紀要第7集』2003年3月、所収)において考察を試みた。

- (7) イソクラテース『アンティドシス』155は下記のとおりである(小池澄夫訳『イソクラテース 弁論集2』京都大学学術出版会、2002年)。(なおこの『アンティドシス』については、英訳版の原文注記で加えられたものである。)

「概して、ソフィストと呼ばれている人びとの誰も巨万の財貨を集めた者などない。むしろある者は貧困のうちに、ある者はつつましく暮らしていたことが、知られるだろう。われわれの記憶するうち、最大の財産をなした人物はレオンティノイのゴルギアスであるが、彼はギリシアで最も裕福であった当時のテッサリアで過ごし、非常に長命で、かつソフィストの稼業に携わった。」

- (8) μελέτη (メレテー) : ①留意、②学習、勉強、③訓練、鍛錬、(特に) 弁論の練習、④実習  
 (9) παιδεία (パイダイアー) : ①養育、②教育、鍛錬、教育の結果身についたもの、教養、③躰、④幼少時代  
 (10) ἐπιμέλεια (エピメレイア) : ①配慮、世話、骨折り、関心、②職務、③(学問・技芸、などに) 励むこと  
 (11) τέχνη (テクネー) : ①わざ、技巧、技術、技芸、学問、②技術の所産、③手段、方法  
 (12) イソクラテース『ソフィストたちを駁す』9-10は下記のとおりである(小池訳、



2002年)。

「9 以上の人びとのみならず、政治弁論を教えると請け合う人びともまた、批判にさらされてしかるべきである。実に彼らもまた真実をまったく顧慮せず、安い授業料とたいそうな宣伝によって、できるかぎり多数の者をかき集め、集めた者から少しでも金を取れば、それが技術 (τὴν τέχνην, an art) の証であると考えている。当人はかくも鈍感であり、しかも他人も自分たち同様の愚物だと思いこんでいるために、一介の素人が即興で行なうよりも稚拙な演説しか書けないにもかかわらず、彼らのもとで学べば、議題に含まれる可能性を何ひとつ見落とすことのない一流の政治弁論家になれると約束している。10 また弁論の能力を説いて、これにあずかるのは経験によるのでも、学習者の天性の素質によるのでもなく、弁論の知識は文字の知識と同じ方法で伝授されると彼らは主張する。そのそれぞれのありようを吟味検討することもなく、ただ広告を誇大にすることによって、自分たちが讃嘆的になるだろう、弁論の教育が高い評判をとるだろうなどと寝惚けている。偉大な技術 (τὰς τέχνας, the arts) の完成は、技術について大法螺を吹く者のよくすることではなく、それぞれの技術の領域に内包されているものを発見する力のある人によるものであることを知らないのである。」

- (13) イソクラテース『アンティドシス (財産交換)』178は下記のとおりである (小池訳、2002年)。

「178 私の弁論の力はこのような願望に遠く及ばないことを承知しつつ、しかし全力をつくして哲学の本性と力を、さらには、さまざまな技術 (τεχνῶν, arts) のどれが哲学に最も近いか、哲学はそれに親しむ者にどのような利益をもたらすのか、哲学者たちは何を約束しているのかを語ることに努めよう。その真実を学び知ったならば、諸君の哲学についての思量と鑑定はよりすぐれたものになると思うからである。」

- (14) σοφία (ソフィア) : ①技術・技芸に秀でていること、術知、②聡明さ、③知恵、④知識、学識

- (15) 『アンティドシス (財産交換)』270は下記のとおりである (小池訳、2002年)。

「270 さてこれらの学問については、当面のところ十分に語り、忠告もつくしたが、知恵 (σοφίας, “wisdom”) と哲学 (φιλοσοφίας, “philosophy”) については、他の問題で争う人にとってはこの名で呼ばれるものについての論議はそぐわないものになるが——それらはこの営みとは無縁であるから——これに関係して審理にかけられ、またある人びとのいわゆる哲学 (φιλοσοφίαν, philosophy) は哲学でない」と主張する私としては、正しく哲学と呼ばれてしかるべきものを、諸君のために確定し明示すべきであろう。」

- (16) 『ヘレネ頌』6は下記のとおりである (小池訳、2002年)。

「6 しかし実のところ、彼らは若者を相手の金稼ぎにしか関心が無い。もっぱら論争に関わる哲学 (φιλοσοφία, “philosophy”) は、これを最も効果的になしとげるものにすぎない。なぜなら、私人の生活にも公的な課題についても何ら試案をめぐらすことなく、よりもよっておよそ何ものにも役立たない議論を喜ぶものだからである。」

- (17)『プシリス』1は下記のとおりである(小池訳、2002年)。なお冒頭のポリュクラテース(前440年頃～前370年頃)はアテーナイ出身のソフィストで(松原著)、小池訳の訳注では「前388年頃にはアテナイで最も著名な弁論術教師として知られていた」と記されている。

「1 ポリュクラテース、あなたの公正な人柄と突然の不遇のことは、よそながら伝え聞いて私の知るところであり、またあなたの著述をいくつか拝読したので、強いてあなたが生業とせざるをえなかった学問教養(τῆς παιδείσεως, the education)の全般について、率直な意見を喜んで表明すべきところであったでしょう。不当な運命に翻弄されながら、しかし哲学(φιλοσοφίας, philosophy)によって生計を立てる途を選んだ人びとのためには、同じ仕事でより広い経験を積み詳細に通じた者が、そのような義捐をなすべきであると考えますからです。」

なおこの引用文中の「哲学」について、訳者は「弁論術を教えることを指している」と注記している。

- (18)『ソフィストたちを駁す』1は下記のとおりである(小池訳、2002年)。

「1 教育を手がける人の誰もがみな、真実を率直に語ることを心がけて、できもしない誇大な約束を揚言しなかったならば、かくも一般の人びとから悪評を立てられることはなかったであろう。しかるに彼らはあまりに軽率に、大言壮語に終始する。かくして思慮のほどを比べれば、怠惰な暮しを選んでいる者のほうが、哲学(φιλοσοφίαν, serious study)に熱心な人間よりよほどまさると評されている。

いづくにあってもしも忌み嫌われ、また蔑まれる教師の筆頭に挙がるのは、日がな論争のための論争に時を費やしている者らである。彼らは真理を追究すると称しながら、表看板を掲げたそもそものはじめから、空虚の論をもてあそんでいる。」

- (19)『戦史』2. 40. 1. は、トゥーキュディデースがペリクレーズの葬送の辞(ペロポネネーソス戦争におけるアテーナイの国葬)として記している、アテーナイ市民に向けて語られた有名な演説の一節で、下記のとおりである(久保正彰訳、岩波文庫、上、1966年)。

「われらは質朴なる美を愛し、柔弱に墮することなき知を愛する(φιλοσοφοῦμεν, lovers of wisdom)。われらは富を行動の礎とするが、いたずらに富を誇らない。また身の貧しさを認めることを恥とはしないが、貧困を克服する努力を怠るのを深く恥じる。…」

- (20)イソクラテース『民族祭典演説』47. は下記のとおりである(小池訳、1998年)。

「47 さらに哲学(Φιλοσοφίαν, Philosophy)は、すべてこれらの制度の発案と設立の支えとなり、政治行為のあり方においてわれわれを教育し、互いの人間関係において柔らかな態度をしつけ、災禍において無知に起因するものと必然によって生じたものとを区別し、一方についてはその防止を、他方については雄々しく耐えることを教えるものであるが、これを世に広めたのはわれらの国であり、また雄弁を顕彰したのもわれらの国である。この技術こそすべての人が会得することをねがい、またこれを究めた者は羨望的とされるものであり、48」

なお καταδείκνυμιには、「見つけて知らせる」「案出して教える、教示する」などの意味がある。

- (21) プラトーン『書簡集』7.326aは、プラトーン全集として伝えられる書簡集の中の、真作と評されている「第七書簡」である。訳者による解説文では次のように説明されている。

「この書簡は、外見上は、シケリアのディオオン派からの協力依頼状に対し、「優勢な者が自重し、率先して法律に服する以外に、内紛解決の道はない」と、諫める趣旨のプラトンからの返信ということになっており、また実際にシケリアへ向け発送されたものであろうが、内容的には、プラトンの一生の自叙伝として、また哲学への案内書として、諸対話篇に劣らぬすぐれた作品である。ともかく、その分量も、『書簡集』全体の二分の一以上を占める長文であり、歴史記述の豊富さ、哲学的記述の多彩さ、緻密さからして作品と呼ぶに値する貴重な文献である。それゆえ、真偽の点でも、『書簡集』中、最も信頼すべきものと見られるのが通例である。執筆年代については、ディオオンの没後、九ヵ月ばかりの時点、前352年初頭の筆と推定される。」

(この書簡の執筆は、訳者の補注で、前352年1月と推定される、と述べられている。)

この「第七書簡」は、教養・教育思想の原論中の原論というべき濃密な内容をもつが(拙論「世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と——社会教育・生涯学習の哲学を考える——」(畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学』学文社、2007年、所収)の第4節の1,29p,を参照のこと)、イェーガーが原文注記で指摘している箇所は次のとおりである(『プラトン全集14』岩波書店、1975年)。

…そしてそのあげくには、現今の国家という国家を見て、それらがのこらず悪政下におかれているという事実を、否応なく認識せねばならなかった、——というのは、法習の現状は、どの国にとっても、もはや、何かびっくりするほどの対策と、あわせて幸運をもってしなければ、とうてい治癒されようもないほどになっていたからですが、——そして、それとともにわたしは、国政にせよ個人生活にせよ、およそそのすべての正しいあり方というものは、哲学からでなくしは見きわめられるものではないと、正しい意味での哲学(τὴν ὀρθὴν φιλοσοφίαν, the right philosophy)を称えながら、言明せざるをえませんでした。つまり、「正しい意味において、真実に哲学している部類のひとつたち(τῶν φιλοσοφούντων ὀρθῶς, true philosophers)が、政治上の元首の地位につくか、それとも、現に国々において権力を持っている部類のひとつたちが、天与の配分ともいうべき条件に恵まれて、真実に哲学するように(ὄντως φιλοσοφίση, really philosophic)なるかの、どちらかが実現されないかぎり、人類が、禍いから免れることはあるまい」と。

- (22) プラトーン『国家』490aは、ソクラテースによって哲学者の本質が語られていく巻であるが、アデイマントスが、哲学者について実情としては人は『たしかに、言葉のうえでは、質問されたひとつひとつの点についてあなたに反対することはできない。しかし事実において目にするところは違うのだ。実情はといえば、哲学(φιλοσοφίαν, philosophy)を志して、若いときに教養の仕上げのつもりでそれに触れたうえで足を洗うということを経ずに、必要以上に長いあいだ哲学に時を過した人たちは、その大多数が、よしまったくの碌でなしとまでは言わぬとしても、正常な

人間からほど遠い者になってしまう。最も優秀だと思われていた人たちでさえも、あなたが賞揚するこの仕事のおかげで、国家社会に役立たない人間となってしまうことだけはたしかなのだ。』(藤沢令夫訳、岩波文庫、下、1979年)と言うかもしれないと口をはさみ、ソクラテースがその問題提起を受けて改めて論じていく箇所である。その論述の文脈は略し、指摘部分のみを以下に引いておく(藤沢訳)。

「…まず第一に、君が憶えているなら、そういう人物の導き手となるのは<真実>であった。彼は何が何でもあらゆる仕方で、真実をこそ追い求めるのでなければならぬ、もしそうでなく、ほら吹きであるならば、ほんとうの哲学(φιλοσοφίας ἀληθινῆς, true philosophy)にはけっして与ることができない、ということであった」

「たしかにそのように言われました」

「ところが、まずこの点が、哲学者というものについて現在一般に考えられているところと、相反するのではないかね？」

「ええ、たしかに」と彼は言った。

「それなら、次のように言えば、われわれは哲学者を適切に弁護することになるのではないだろうか？——すなわち、心底から学ぶことを好む者は、真実在に向かって熱心に努力するように生まれついているものであって、…」

(23) プラトーン『プロタゴラス』313cf. は、本継続研究(10)の原文注記60. に付した<注記と考察>(25)において引いている。

(24) イェーガーが『パイドロス』について指摘するのは、その感銘深い末尾(拙論「想起に関する研究」2003年3月、「九 プラトーンの想起説と教育・文化の思想——記憶をめぐる——」の注16で引用)の直前の箇所であり、プラトーンはソクラテースに次のように語らせている(藤沢訳、岩波文庫、1967年、に拠る)。

「ソクラテース ぼくの思うところでは、彼イソクラテースは、そのもって生れた素質において、リュシアス流の弁論の水準をはるかに抜いてすぐれているし、その上、人がらも一段と高貴なところがあるようだ。だから、いまに年齢が進むにつれて、もし、彼が現在手がけている専門の言論そのものの領域で頭角をあらわし、かつて言論にたずさわった人たちとくらべて、大人と子供以上の差をつけたとしても、べつに驚くにはあたらないだろう。のみならず、さらに、彼がそれだけの業績に満足できずに、より崇高なある種の衝動にみちびかれて、もっと偉大なものに到達したとしても、それはじゅうぶんうなずけることだ。なぜかという、あの男の精神には、友よ、知にたいするひとつの切実な欲求が、生まれつき宿っているのだから。——さあそれでは、ぼくはこれだけのことを、この土地にすむ神々からおくられた言葉として、わが愛する若者イソクラテースに伝えよう。…」

ここのイソクラテースの才能を賞賛するような描写は、プラトーンの諸対話篇中では例外的に目を引くものとなっているが、イェーガーはこの箇所を歴史的、事実に関係から光をあてようとしている。なお参考までに、ソクラテースの生没年は「前469年6月4日頃～前399年4月27日」であり、イソクラテースのそれは「前436年～前338年」である。

また原文注記に出てくるアンティステネース(前455/444年頃～前365/360年頃)

は、アテナイの生まれのギリシアの哲学者であり、「初めゴルギアースに学び、教師をしていたが、のちソクラテースの熱心な弟子になる。」とされる（松原著）。なおアンティステネースに関しては、本継続研究（7）Ⅱ．1．の〈注記と考察〉（3）および3．の〈注記と考察〉（8）で確認している。

- (25) イソクラテース『ピリッポスに与う』81の後段は下記のとおりである（小池訳、1998年）。

「…実は、私は市民の誰よりも政治家の天分を欠いて生まれついたのである。声が十分に通らないし、また大衆を相手にしたり、いつも演壇で騒ぎまわる連中と口汚い悪罵の応酬をしたりする度胸もない。」

- (26) イソクラテース『パンアテナイア祭演説』10. は下記のとおりである（小池訳、2002年）。

「このようにわたしは、いずれもわが国では最大の力をもつ二つのもの、十分な声量と豪胆との両方に、おそらく同胞市民の誰よりも不足していた。これに恵まれない者は、公の認知に関するかぎり、国庫に借りをつくっている人間より以上に、権限を剥奪されて右往左往するほかない。というのも、後者には宣告された罰金を支払う希望が残されているが、前者の人びとはもって生まれた性質を変えることができないからである。」

- (27) [イソクラテースの]『ピリッポスに与う』の81は上の原文注記（25）で引いている。それに続く82は下記のとおりである（小池訳、1998年）。

「だがすぐれた思慮と学問教養の資格についてであれば、夜郎自大に聞こえるかもしれないが、私は断然これを主張し、私自身をその末席に連なる者ではなく、指導者と位置づけるだろう。こうした事情から、私はおのれの天分と能力が命ずるやり方で、アテナイならびにギリシアの諸国家、またそこにおいて栄位に就いている指導者に勧告を試みるものである。」

- (28) 「第二次アテナイ海上同盟」の結成は前377年。

- (29) 例示されている『アンティドシス（財産交換）』は、ドイツ語版では『アレイオス・パゴス会演説』になっている。

- (30) トゥーキュディデース『戦史』の3.82. は、内乱（ペロポネネーソス戦争）が人心に引き起こした惨状を観察し書き留めた箇所である。そこに記された史家トゥーキュディデースのメッセージは、意識して、私たちの「現代」にも向けられている。そういう理由で、この箇所は要約することなく、この拙論のⅣ．（考察ノート）の【資料-9】として掲載しておく。

- (31) プラトーン『国家』591e は、ソクラテースが「正」「不正」を論じながらグラウコンに向かって語っている箇所で、ソクラテースは、財貨の獲得に関しても、財貨に囚われる心性を批判しつつ、次のように論じている。

「自己の内なる国制（τὴν ἐν αὐτῷ πολιτείαν, the constitution in his soul）に目を向けて、みずからの国制のなかにあるものを、財産の多寡によって、いささかでもかき乱すことのないように気をつけながら、できるかぎりこのような原則にもとづいて舵を取りつつ、財産をふやしたり消費したりすることだろう」（藤沢訳、岩波文庫、《下》、1979年）

- (32) 『パイデシア』Ⅱ, 131f. は「6『ゴルギアース』: 政治家としての教育者」の章である。なお《原文注記》24. は英訳版で挿入されたものである (したがってドイツ語版と英訳版とでは、《原文注記》の番号にずれが生じている)。なお、英訳版《原文注記》には、拙論ではいちいち指摘しないが、補筆された箇所が少なからずある。こうしたことも、イェーガーが英訳版に深く関わっているということの証左となる。
- (33) イェーガーが指摘しているプラトーン『ゴルギアース』449d, 451a, 453b-e, 455d. は下記のとおりである (加来彰俊訳、岩波文庫『ゴルギアース』1967年、に拠る)。

449d については、その冒頭の箇所のみ引いておく。

**ソクラテス** さあ、それでは、いいですか、あなたは弁論の技術 (ῥητορικὴς… τέχνης, rhetorical art) を心得ておられる人だし、そして、ほかの人たちをも弁論家にすることができるかと主張しておられるのだから、それなら、その弁論術 (ῥητορικὴ, rhetoric) というのは、およそ存在するもののうちの、何に関する技術なのですか。たとえば、機織の術は、着物の制作に関する技術ですね、そうでしょうか？

**ゴルギアース** そう。

451a の直接該当する部分は下記のとおりである。

**ゴルギアース** そう、そう考えてくれるのが正しいのだよ、ソクラテス。君はほんとうに正しく理解してくれるね。

**ソクラテス** さあ、それなら、あなたのほうも、わたしの訊ねていたことに答えて、決着をつけてください。というのは、弁論術 (ῥητορικὴ, rhetoric) とはまさに、主として言論を使用する技術 (τεχνῶν, arts) の一つなのであるが、しかしそういう技術は、ほかにもまだいろいろとあるのですから、何に関して、言論によって目的を達成する技術が弁論術なのか、それを言うてみるようにしてください。たとえば、…

453b-e の、直接該当する部分を限定的にピックアップすると下記のとおりである。

**ソクラテス** …わたしとしては、あなたが言われているような、弁論術から生ずる説得 (πειθῶ, the persuasion) というのが、いったい、どういう説得のことであり、また、どんな事柄についての説得なのか、いいですか、その点がもう一つ、わたしにははっきりしないのですよ。… (中略) …でもしかしやはり、あなたが弁論術から生ずる説得と言われるものが、いったい、どういう説得のことであり、また、何についての説得であるかを、あなたに訊ねてみることにしたいのです。… (中略) …

**ソクラテス** さあ、それでは、弁論術についても、言うてみてください。どうですか、弁論術だけが説得をつくり出すのだと、あなたには思われますか、それとも、ほかの技術だって、同じようにそうするのですか。で、それはこういう意味なのです。およそ何かを教える (διδάσκει, teaches) 人は、自分の教えることについては、説得するのですか、それとも、しないですか。

455d の、直接該当する部分を抜き書きすると下記のとおりである。

**ソクラテス** … (中略) …だから、わたしから重ねて質問を受けられるなら、それはまたその人たちからも重ねて質問されているのだと、そう考えてください。

で、それは、こういう質問なのです。——「ゴルギアスよ、あなたのもとで勉強するなら、われわれは何を得ることになるのか。どんな事柄について、われわれは国家に提案することができるようになるのか。それはただ、正と不正についてだけであろうか。それとも、今しがたソクラテスが話していたような事柄についても、提案することができるようになるのだろうか」とね。——さあ、それでは、その人たちに答えてやるようにしてみてください。

(34) この原文注記は、英訳版で新たに加えられたものである。

(35) 『アンティドシス (財産交換)』161は、下記のとおりである (小池訳)。

さてまた国家公共のことについては、何を言うべきか。私自身は、この転変のために自分の処置を誤った。私が私産を取り戻しはじめたとき、というのはラケダイモンとの戦争で家産はすべて失われていたのだが、以前はこれあるがために私の父は国家にとっても有用な人物たりえたし、同時に私を万事に行き届いた教育を授けることができ、おかげで私は現在の市民の間でよりも、よほど当時の同年輩の生徒の間で有名だったくらいである。

(36) 偽プルタルコス『十大弁論家列伝』(837b)の該当箇所をやや広く確認しておくとして下記のとおりである (伊藤照夫訳『プルタルコス モラリア10』京都大学学術出版会、2013年、に拠る)。

「…これは疑う余地のないことだが、彼は他人のために弁論をせさせと代作したけれども、ただ一篇だけは人の前で演説しているのである。すなわち、財産交換 (アンティドシス) に関するものだ。彼は学校を設立すると、哲学の研究と思索の結果を書きつらねることに専心した。かくして『民族祭典演説 (パネーギュリコス)』と他にいくつかの討議用演説とが書かれたわけであるが、それらのあるものは彼自らが読み上げたか、他の人たちが読み上げるために準備してやったものであり、こうすることでギリシア人の考えを正しい方向へ導いていけたらと思ったのである。だが、彼の意図するところは実現を阻まれたので、この手の活動は放棄して学校を主催した。ある言い伝えによれば、手始めはキオス島で九人の生徒からであったという。…」

なお、この原文注記で検討されている ἐπί には、古川編著『ギリシア語辞典』によれば、「～の時に」という意味があり、用例の一つとして「ἐπὶ Δαρείου (Δ. 王の時代に)」が示されている。

(37) イソクラテースは、『アンティドシス (財産交換)』193で下記のように記している (小池訳)。

誤解のないように断わっておくが、私は諸君の前では約束を控え、入門希望者を相手に論じるときにのみ、もてる力をすべて示しているのではない。実際、この仕事を始めた頃には、そのような非難を受けたことがあって、その際に反駁文を公にして、大げさな約束をする者を咎めるとともに、私自身の見解を表明しようとした。

193でこのように述べ、続く194で、自らの『ソフィストたちを駁す』から一文を引いている。

(38) ここのカッコ内の参照事項の記述は、英訳版で補筆されたものであるが、判然としない。

- (39) 訳文の「Wilamowitz (*Platon* II, 108) の説に奉じて」は英語版で補筆されたものである。
- (40) 小論のこの段落に続く論述のことを指している。
- (41) ドイツ語版では、ここに、Pouly-Wissowa IX .2175.、の指示がある。
- (42) 『パイドロス』の末尾に、プラトンの対話篇としてはほとんど例外的に、‘ソクラテース’がイソクラテースの資質を高く評価することばが記されている。上記《原文注記》24. を参照のこと。

IV. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート⑤」  
～継続研究 (11) における～

〔IV. の趣旨について：イェーガーは『パイデア』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている (本継続研究 (3)、II. 第1章<訳文①>)。イェーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイデア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイデア』研究の一環として記してみようと思う。〕

ここでは、トゥーキュディデース (前500年頃～前423年頃) 『戦史』 3.82, 83, 84を引いておく。その82は、イェーガーがこの小論の《原文注記》22. で指示している箇所である。このパートは、トゥーキュディデースが、ケルキューラの内乱 (ペロポネネソス戦争) が人心に引き起こした惨状を観察し記した箇所であり、イェーガーはそれを、イソクラテースが汎ギリシア主義の (Panhellenic, panhellenischen) 理想をかかげ、自らの教養思想をもってアカデーメイアと論争していく、そのギリシアの歴史的状況として引いている。しかしその内容は、私たちのこの現代に向けて書かれているようでもある。ここでの引用は、久保正彰による、トゥーキュディデースの魂が乗り移ったような‘勢い’をもつ訳文 (岩波文庫) を用いる。

なお、トゥーキュディデースの「この時生じたごとき実例は、人間の性情 (φύσις ἀνθρώπων, human nature) が変らない限り、…、未来の歴史にも繰返されるであろう。」という叙述と、ヴァイツゼッカー大統領演説 (1985年) の「人間は何をしかなないのか——これをわれわれは自らの歴史から学びます。(Wir lernen aus unserer eigenen Geschichte, wozu der Mensch fähig ist.)」「でありますから、われわれは今や別種の、よりよい人間になったなど思い上がりではありません。(Deshalb dürfen wir uns nicht einbilden, wir seien nun als Menschen anders besser geworden.)」、および「道徳に究極の完成はあり得ません (Es gibt keine endgültig errungene moralische Vollkommenheit) ——いかなる人間にとっても、また、いかなる土地においてもそうであります。」(永井清彦



訳『荒れ野の40年——ヴァイツェッカー大統領演説 全文——』、岩波ブックレットNo. 55、1986年) という言葉との照応については、拙論「想起に関する研究——社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて——」(都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月、所収)を参照のこと。

#### 【資料-9】

トゥーキュディデース『戦史』巻3(前428夏—425春).82, 83, 84(久保正彰訳、岩波文庫(中)、1966年)

なお、[84]は全体が〔 〕で括られているが、訳者は注記において「古代の注釈家はこの章に注を附していない。」と、この章をめぐる説明をしている。

[82] このようにして内乱は残虐の度を増しつつ荒れ狂った。しかもこの事件は最初の実例であっただけに人々に一そう強烈な印象を与えた。その後になると、処々の都市においてもアテーナイ勢の加勢を導入しようとする民衆派領袖と、ラケダイモン勢を入れようとする貴族派の紛争が生じ、そのために極言すれば全ギリシア世界が動乱の渦中に陥ったからである。平和でさえあれば、これらの外部勢力の干渉を仰ぐ理由も意思もない各派指導者も、戦時となってからは、いずれかの陣営との同盟関係が生じ、国内反対派の弾圧とそれによる自派の勢力増大を求めて政治的均衡を崩そうと望む者たちにとっては、外国勢力の導入が簡単にはかれるようになった。内乱を契機として諸都市を襲った種々の災厄は数知れなかった。この時生じたごとき実例は、人間の性情(φύσις ἀνθρώπων, human nature)が変らない限り、個々の事件の条件の違いに応じて多少の緩急の差や形態の差こそあれ、未来の歴史にも繰返されるであろう。なぜなら、平和と繁栄のさなかにあれば、国家(πόλεις, states)も個人(ιδιώται, individuals)も己の意に反するごとき強制の下におかれることがないために、よりよき判断を選ぶことができる。しかるに戦争は日々の円滑な暮らしを足もとから奪いとり、強食弱肉を説く師となって、ほとんど人間の感情をただ目の前の安危という一点に釘づけにするからである。

こうして次々と諸都市の政情が内乱と化していくと、後から乱に陥るものは先の実例から何を学ぶのか、先よりも遥かに過激な意図や計画を案出し、老獪きまわる攻撃手段にたいしては非常識も甚だしい復讐手段をもって抗争するのであった。やがては、言葉すら本来それが意味するとされていた対象を改め、それをを用いる人の行動に即してべつの意味をもつこととなった。たとえば、無思慮な暴勇が、愛党的な勇気と呼ばれるようになり、これに対して、先を見通して躊躇うことは臆病者のかくれみの、と思われた。沈着とは卑怯者の口実、万事を解するとは万事につけて無為無策に他ならず、逆にきまぐれな知謀こそ男らしさを増すものとされ、安全を期して策をめぐらすといえ、これは耳ざわりのよい断り文句だと思われた。また、不平論者こそ当座の信頼に足る人間とされ、これに反論する者には疑惑がむけられた。陰謀どおりに事を遂げれば知恵者、その裏をかけば益々冴えた頭といわれた。だがこれらの奸策によるまいとして道を講ずる指導者は、党派の団結を破るもの、反対派に脅かされているもの、と非難された。何ごとによらず、人の先をこして悪をなすものが誉められ、悪をなす意図すらないものをその道に走らせるのが、賞揚

に値することとなった。そして遂には肉身のつながりも、党派のつながりに比すればもの数ではなくなった。党派のためとあれば、仲間は理由をとわず行動に走ったからである。もともとかくの如き党派的結合の目的は、従来の慣習や法律 (κειμένων νόμων, the prescribed laws) にもとづいて益し益されることではなく、既存の規 (θείω νόμω, the established laws) を度外視して自派の權益を増大することにあった。したがって党内の相互の信頼も、神聖な誓いによって結束されたものはすくなく、多くは共犯意識によって固められていた。また、反対派から条理にかなった申し入れがあれば、自派が優勢であれば先ず敵に対する手を十分に打ってから、相手の言分を入れたが、けっして寛容な態度で受け入れることはなかった。また、自分の方が復讐をうけるいわれを避けることよりも、復讐をしとげる方が重大であると考えた。そしてたまたま、和解の誓約が成立した場合には、誓約自体、双方とも目下の窮状打開のみを目的としていたので、外部からの救援勢力が得られない間は効力を発揮した。だがその間にも機を狙って敵の虚を衝き、決然と先制攻撃にでた方が、正々堂々たる対決よりも、背信的な復讐をとげる満足感を味わうことができたのみか、結局はその方が安全であり、また欺瞞によって勝てば知恵の戦でも勝者の名を得たことになる、と考えられた。そして殆んど一般の場合、善行をなして馬鹿と呼ばれるよりも、悪行をなして惻口とよばれやすい世情となり、人々は善人たることを恥じ、悪人たることを自慢した。

これらすべての原因は、物慾と名譽慾に促された権勢慾であり、さらにこれらの諸慾に憑かれたものたちの、盲目的な派閥心であった。というのは、諸都市における両派の領袖たちはそれぞれ、体裁のよい旗印しをかかげ、民衆派の首領は政治的平等を、貴族派は穏健な良識優先を標榜し、言葉の上では国家公共の善 (κοινά, the common weal) に尽すといいいながら、公けの益を私物化せんとし、反対派に勝つためにはあらゆる術策をもちいて抗争し、ついには極端な残虐行為すら辞さず、またこれを受けた側はさらに過激な復讐をやった。かくのごとき争いに陥ちたものらは、正邪 (δικαίου, justice) の判断や国家の利害得失 (πόλει ξυμφόρου, the public weal) をもって行動の規範とはせず、反対派をしたたか傷つけるその場の快感が得られるまで争い、当座かぎりの勝利慾を貪婪に充さんがためには、不正投票による判決であれ、実力行使の横暴であれ、権勢獲得の手段であれば、何のためらいもなく実行に移した。したがって、何れの派も何をなしても心に恐れとがめる者はなく、たくみな口実を設けて、人としてなすべからざるをなした者らが、かえって好評を得ることとなった。そののみか、中庸を守る市民らも難を免れえなかった。かれらは両極端の者たちから、不協力を咎められ、保身的態度をねたまれて、なし崩しに潰滅していった。

[83] このようにして内乱の度にギリシア世界には、ありとあらゆる形の道徳的頹廢 (κακοτροπίας, depravity) がひろまった。率直さ (εὐθες, simplicity) とは人格高潔にして備わるべき徳であるのに、それも今は世の嘲笑をうけて姿を消し、市民はたがいに政見を異にして敵視しあった為に、いたるところに猜疑の念が目立って強くあらわれた。なぜならば、これを和解させるべき言葉も、頼みとする根拠を失い、おごりかな誓約も拘束力を失ったからであり、また誰もかも勢力を握ればみ

な、己の安泰の期しがたいのを悟って、損害を未然に阻止する手立てに汲々とするあまり、他を信頼する余裕を失ったからである。だが一般的にみると、最後まで生き残った者たちは、権謀術策に劣っていた者たちが多い。その訳は、この者たちは己れの足らざるを知り、相手の巧妙さを恐れていたのも、相手の口車に乗りはしないか、相手は捕捉しがたい手で味方の計画の裏をかき先廻りをするのではないかと警戒を怠らず、行動にむかって果敢に突き進んだからである。かれらの計画は見えずいている、策謀ではや勝ちと決ったものを実行に移して手に入れる必要はない、と高をくくっていた者たちは、虚をつかれてかえって破滅を招いたのであった。[84] [さてケルキューラの内乱は、これらの事態がほとんど余すところなく現実にもむきだしにされた最初の事例であった。穏健な良識 (σωφροσύνη, moderation) どころか暴虐な支配ともいべき圧政に苦しめられていた民衆が、今や裁きの場に引き立てられたかつての支配者に報いるあらゆる行為の中には、それまでの窮乏を脱したいと願う者や、とりわけ激情に駆られた者が、他人の所有を狙う心から無法な判決を下した例も多々あった。だがなかでも物質的貪婪さとはべつに派閥的な拮抗から、怒りにわれを忘れるあまり、残虐無慈悲な誅戮をなした例が続出した。一国において人間生活の秩序が根底から覆されてその極に達すると、それまでにはや法 (νόμους, the laws) を度外視して罪悪をなすことになれてしまった人間の本性 (ἡ ἀνθρωπεία φύσις, human nature) は、今や法 (νόμων, the laws) そのものをすら支配する力を持ち、このときとばかり激情の赴くままに正体を露呈し、正義 (δικαίου, justice) を蹂躪し、己れよりもすぐれているものを敵視する。嫉妬心がかくも破壊的な力を持っているものでなかったなら、人間が神よりも復讐を、正義よりも利慾をあがめる事態など生じえなかったに違いない。そして遂には、人間は神や正義などについての、敵味方共通の掟 (νόμους, principles) を守っていれば、敗れた者にも救済の望みがなお残っているものを、相手を誅罰せんとはやるあまり、己もいつかは神や正義に訴えねばならぬ危機に見舞われるかも知れぬことを忘れて、先に立ってそれらの規を打ち壊し跡形もなくしてかえり見ないのである。]

Received : May, 10, 2018

Accepted : June, 13, 2018